

# 加利福尼亚の宝島

(お伽冒険談)

国枝史郎

青空文庫



「あずきじま小豆島紋太夫が捕らえられたそうな」

「いよいよ天運尽きたと見える」

「八幡船の後胤もこれでいよいよ根絶やしか。ちよつと惜しいよ  
うな気もするな」

「住吉の浜で切られるそうな」

「末代までの語り草じゃ、これは是非とも見に行かずばなるまい」

「あれほど鳴らした海賊の長おさ、さぞ立派な最期さいごをとげようぞ」

せつつのくに摂津国大坂の町では寄るとさわると噂である。

当日になると紋太夫は、跛ちんばの馬に乗せられて、市中一円を引き廻されたが、松並木の多い住吉街道をやがて浜まで引かれて来た。矢来の中へ押し入れられ、首の座へ直ったところで、係りの役人がつと進んだ。

「これ紋太夫、云い遺すことはないか？」作法によつて尋ねて見た。

「はい」と云つて紋太夫は遅たくましい髯面をグイと上げたが、「私は、海賊にござります。海で死にとうござります」

「ならぬ」と役人は叱しつた咤した。

「その方まえ以前かた何んと申した。海を見ながら死にとうござると、

このように申した筈ではないか、本来なれば千日前の刑場で所刑

さるべきもの、海外までも名に響いた紋太夫の名を愛でさせられ、特に願いを聞き届けこの住吉の海辺において首打つ事になったというは、一方ならぬ<sup>かみ</sup>上のご仁慈じゃ。今さら何を申しおるぞ」

「いや」

と紋太夫は微笑を含み、

「海で死にたいと申しましたは、決して海の中へはいり、水に溺れて死にたいという、そういう意味ではござりませぬ」

「うむ、しからばどういう意味じゃな？」

「自由に海が眺められるよう、海に向かった矢来だけお取り払いくださいますよう」

「自由に海を眺めたいというのか」

「はいさようでございます。高手小手に縛ばくされた私、矢来をお取り払いくだされたとてとうてい逃げることは出来ませぬ」

「警護の者も沢山いる。逃げようとて逃がしはせぬ。……最後の願ねがいじや聞き届けて進すすめる」

「有難い仕合せに存じます」

そこで矢来は取り払われ波平たいらかの浪華なわの海、住吉の入江が見渡された。頃は極月二十日の午後、暖国のこととて日射し暖かに、白砂青松相映じ、心ゆくばかりの景色である。

太刀取りの武士が白刃しらばを提ひげ、静かに背後うしろへ寄り添よった。

「行くぞ」

と一声掛けて置いて紋太夫の様子を窺うかがった。

紋太夫は屹きつと眼を据えて、水天髻すいてんほうふつ髻むすの遠方おちかたを喰い入るばかりに睨にらんでいたが、

「いざ、スツパリおやりください」

とたんに、太刀影陽たちかげひに閃ひらめいたがドンと鈍い音がして、紋太夫の首は地に落ちた。颯さつと切り口から迸ほとばしる血！ と見る間にコロコロコロと地上の生首渦を巻いたが、ピヨンと空中へ飛び上がった。同時に俯向うつむきに仆たれていた紋太夫の体が起き上がる。首は体へ繋がったのである。

「ハツハツハツハツ」

と紋太夫は大眼カツと見開いて役人どもを見廻したが、

「ご免蒙ごうむる」

と一声叫ぶと、海へ向かつて走り出し、身を躍らせて飛び込んだ。パツと立つ水煙り。そのまま姿は見えなくなつた。

小豆島紋太夫の持ち船が、瀬戸内海風ノ子島の、深い入江にはいつて来たのは、同じその日の宵のことであつた。

船中寂<sup>せき</sup>として声もない。

二本帆柱<sup>ばしら</sup>の大船で、南洋船と和船とを折衷したような型である。鋭い弦月が現われて、一本の帆柱へ懸かつた頃、すなわち夜も明方の事、副将来島<sup>くるしま</sup>十平太は、二、三の部下を従えて胴の間から甲板<sup>かんばん</sup>へ出た。

「ああ今夜は厭な気持ちだ。月までが蒼褪<sup>あおざ</sup>めて幽霊のように見え



る」

眩きながら十平太は東の空を振り仰いだが、「今頃骸は晒されていようぞ。ああもう頭領とも逢うことが出来ぬ」

「とんだことになりましたな」一人の部下が合槌を打つ。「あの偉かった頭領がこうはかなく殺されようとは、ほんとに、夢のようでございますなあ」

「俺はあの時お止めたものだ。……大坂城代も町奉行も我ら眷族の者どもを一網打尽に捕らえようとてぐすね引いて待っているよ、危険千万でござるゆえ、大坂上陸はお止めなされとな。しかし頭領は聞かれなかった。——近頃南洋のある国よりある地理書を城代まで献上致した風聞じゃ。是非とも地理書を奪い取り、書

かれた中身を一見せねばこの紋太夫胸が治まらぬ——こう云つて無理に上陸したところ、はたして町奉行手附きの者に、騙たばかられて捕縛めしとられ、無残にも刑死をとげられたのじやよ」

## 二

その時、あわただしく胴の間から一人の部下が飛んで来たが、月の光のためばかりでなくその顔はほとんど真つ蒼であつた。

「どうした？」

と十平太は訝いぶかし気に聞いた。

「大変なことが起こりました」胸を拳で叩きながら、「頭領の部

屋に、頭領が……」

「なに？」

と十平太は進み出た。

「えい、あわてずにしつかり云え！」

「はい、頭領がおられます！ はい、頭領がおられます。いつものお部屋におられます」

「馬鹿！」

と海賊の塩風しおかぜごえ声、十平太は浴びせかけたが、

「首を打たれた頭領が何んで船中におられるものか。嘉三貴様血迷ったな！」

嘉三と呼ばれたその男は、そう云われても頑強かたくなに、頭領がい

ると叫ぶのであった。

「いえ血迷いは致しませぬ。この眼で見たのでございます」

「そうか」ととうとう十平太も不審の小首を傾かしげるようになった。と、見て取った手下どもは一時にゾツと身みぶる顫いをした。迷信深い賊の常として、幽霊を連想したのであった。

十平太は腕を組んでしばらく考えに沈んでいたが、バラリ腕を解くと歩き出した。

「よろしい、行って確かめてやろうぞ」

胸の間の頭領の部屋は、諸国の珍器で飾られていた。

インド 印度産の黒檀の卓テーブル子。

ペルシャ 波斯織りの花毛氈もうせん。アフガニスタ

ンの絹窓掛け。サクソンの時計。支那の硯。インカ帝国から伝わった黄金こがね作りの太刀や甲かぶと。朝鮮の人参は袋に入れられ柱に幾個いくつか掛けてある。

と、正面の扉とが開いて、十平太がはいって来た。すると部屋の片隅のゴブラン織りの寝台ねだいから嘎れた声が聞こえて来た。――

「おお十平太か、よいところへ来た。ちよつとここへ来て手伝つてくれ」

頭領小豆島紋太夫の声に、それは疑がないのであつた。

はつと十平太は呼吸いきを呑んだが、さすがに逃げもしなかつた。

「頭領」と声を掛けながら寝台ねだいの方へ突き進んだ。見れば寝台に紋太夫がいる。広東カントン出来の錦欄の筒袖に蜀紅錦の陣羽織を羽織

り、亀きつこう甲模様の野袴を穿き、腰に小刀を帯びたままゴロリとばかりに寝ていたが、頸くびの周圍まわりに白布で幾重にもグルグル巻いているのがいつもの頭領ちがと異ちがっている。

両手で頸を抑えながら、大儀そうに紋太夫は立ち上がった。

「頸くびへさわつちやいけないぜ」

嗚しわがれた声で云いながら、黒檀の卓の前まで行くとドンと椅子へ腰掛けた。

「頭領」

と十平太は立ったまま紋太夫の様子を眺めていたが、「いつお帰りになられましたな？　そうして頸くびはどうなされましたな？」

「そんな事はどうでもよい。これちよつと手伝たづなつてくれ。隠かくしか

ら、書籍ほんを出してくれ」相変わらずいかにも呼吸いき苦しそうに紋太夫は云うのであった。

で、十平太は書籍ほんを出した。黒い獣皮で装幀された厚い小型の本である。

「これだよ、地理書は！ ああこれだよ！」

嬉しそうに紋太夫は笑い出した。「アツハハハウフフフアツハハハハ。ヒヒヒヒヒ」

音はあつても響きのないいかにも気味の悪い笑声で、聞いているうちに、十平太は身の毛のよだつような気持ちをした。

「まるでこれでは幽霊だ。それに何んのために白い布きれを頸にあんなに巻いているのだろう」

口の中で呟いて、十平太は見詰めていた。

「ああそうだよ。これが地理書さ。……上陸すると俺はすぐに城代屋敷まで行ったものさ。かなり嚴重な構えであつたが、忍ぶことにかけては得意だからな。うまうま盗み出したというものさ」

「しかし頭領」と十平太は椅子に腰をかけながら、「あなたは町奉行手附きの者に捕らえられた筈ではありませんか」

「うん」

と紋太夫は頷いたが、うなず「いかにも俺は捕らえられ住吉の海辺で首を切られたよ。が、この通りここにいる。そうしてお前と話している。ハハハハ、これでいいではないか。ただし首へはさわるなよ。ひよつと落ちると困るからな」



書籍ほんを取り上げ頁ページを翻ひるし、じつと一ひとつ所ところを見詰めたが、ガラリ言葉の調子を変え紋太夫はこう云った。

「聞け十平太！ よく聞かがいい！ 宝は海の東南にあるそうじや」

「どのような宝でございますな？」

「隠されたる巨万の富だ！」

紋太夫は愉快そうに云う。

三

「隠されたる巨万の富？」 十平太は鸚鵡おうむ返しに、「場所はどの辺

でございますな？」

「遠い遠い海のあなたのメキシコという国じゃそうな」

「メキシコ？ メキシコ？ 聞かぬ名じゃ」

十平太は呟いた。

「そこに一つの湾がある」

「大きな湾でございましょうな？」

「日本の九州より大きいそうじゃ。湾の名は加利福尼亚カリフォルニアという」

「加利福尼亚湾でございませうかな」

「そこに一つの島があるそうじゃ。チブロンという島じゃそうな。

宝はそこに隠されてあるのじゃ。——みんな地理書に記されてある」

「どのような宝でございましょうな？」

「砂金、宝石、異国の小判」

「無人の島でございますかな？」

「兇暴残忍の土人どもが無数に住んでいるそうじゃよ」

「頭領」

と十平太は立ち上がった。「土人どもを平<sup>たい</sup>らげて宝を奪おうで

はございませぬか」

「航海は往復二年かかるぞよ」

「二年？」と十平太は眼を見張った。

「恐ろしいか？」と紋太夫は笑う。

「何んの！」と十平太は哄笑した。

「瀬戸内海の大海賊、小豆島紋太夫の手下には、臆病者はおりませぬ筈！」

「おおいかにもその通りじや、それではいよいよ加利福尼亞<sup>カリフォルニア</sup>へ行くか！」

「申すまでもございませぬ」

「準備に半年はかかるうぞ」

「心得ましてございます」

「鉄砲、大砲も用意せねばならぬ」

「それも心得ております」

「四方に散々<sup>ちりぢり</sup>に散っている友船を悉く集めねばならぬ<sup>ことごと</sup>」

「すぐに早船を遣わ<sup>つか</sup>しましょう」

「よし」

と紋太夫は拳を固め黒檀の卓をトンと打った。とたんに首ががつくりとなる。

「ほい、あぶない」

と云いながら、両手で頸くびをグイと支えた。

「まだまだ首は渡されぬて、ハツハハハ」

と物凄く笑う。

真に気味の悪い笑声である。

八幡大菩薩の大旗を、足利あしかが時代がの八幡船ふねのように各めいめい自船へさき首くびへ押し立てた十隻の日本の軍船いくさぶねが、太平洋の浪を分けて想像

もつかない大胆さで、南米墨西哥メキシコへ向かったのは天保末年夏のことであつた。

幾度かの暴風幾度かの暴雨、時には海賊に襲われたりして、つぶさに艱難を嘗めた後、眼差す加利福尼亞カリフォルニアへ着いたのは日本を立つてから一年後の夏でもうこの時は軍船の数もわずか五隻となつていた。

ここで物語は一変する。

墨西哥メキシコ、ソラノ州、熱帯植物の生い茂っているドームという海岸へ舞台は一変しなければならぬ。

チブロン島とドーム地帯とは小地獄という海峡を距へだててほとん

ど真つ直ぐに向かい合っていた。その距離一里というのだから、互いの顔さえ解りそうである。

そのドームの深林の中に天幕テントが幾十となく張つてあつた。大英國の探險家ジョージ・ホーキン氏の一隊で、これもやはりチブロンの大宝庫を探し当てようため、遠征隊を組織して今からちようど一月ほど前から窃ひそかにここに屯たむろして様子を窺うかがつていたのであつた。

熱国の夕暮れの美しさ。真紅こがね黄金色、濃こむらさき紫落ちる太陽に照らされて、五彩に輝く雲の峰が、海のあなたにむら立ち昇り、その余光が林の木々天幕の布を血のような気味の悪い色に染め付けている。

鳥の啼く音や猿の叫び声や豹の吠え声や山犬の声などが、林の四方で騒がしくひっきりなしに聞こえていたが、それはどうやら遠征隊の傍若無人の振る舞いを怒っているようにも聞きなされた。と、一羽のメキシコ孔雀くじやくが虹のような美しい尾をキラキラ夕陽に輝かせながら林の奥から飛んで来たが、天幕テントの側そばの低い木へ静かに止まって一声啼いた。

「やあ孔雀だ。綺麗だなあ」

こういう声が聞こえたかと思うと、天幕の口から一人の少年がひらりと身軽に走り出た、これはホーキン氏の令息でジョンと云って十二歳のきわめて愛らしい美少年であった。

「よし、こん畜生捕つかまえてやるぞ」



躑あしおと音を忍んで近寄って行き、そつと片手を差し出すと、孔雀

はピヨンと一唳ね唳ね他の灌木へ飛び移った。

「おやおや、こいつ狡猾ずるい奴だ」

ジヨンは口小言を云いながらまたそつちへ近寄って行く。

とまた孔雀は他の木へ移った。

「いけねえいけねえ」

と眩きながらジヨンはそつちへ追って行く。

#### 四

ジヨンの姿はいつの間にか、木蔭に隠れて見えなくなつた。

夕栄えが褪<sup>さ</sup>め月が出て、原始林はすっかり夜となつたが、どうしたのかジヨンは帰つて来ない。炊事の煙りが天幕<sup>テント</sup>から洩れ焚火<sup>たきび</sup>の明りが赤々と射し、森林の中は得も云われない神秘の光景を呈したが、ジヨン少年の姿は見えない。

と、先刻ジヨンが出て来たその同じ天幕から、

「ジヨンはどうした。見えないではないか」

こういう声が聞こえたかと思うと、長身肥大の立派な紳士が、片手に銃を持ちながらつと戸外へ現われた。

「ジヨン！ ジヨン！ ジヨンはいないか！」

呼びながら耳を澄ましたが、どこからも返辞は聞こえて来ない。この紳士こそ一隊の隊長ジョージ・ホーキン氏その人であつた。

が、次第に不安に感じられると見え、いちいち天幕を訪ねながら、「ジョンはいないかね？」と尋ね廻った。

ジョン少年失踪の評判が隊全体に拡がった時人達はいずれも仰天した。我も我もと天幕を出て隊長の周囲まわりへ集まった。

そうして四組の搜索隊が忽ちのうちに出来上がった。松たいまつ火を

振りがんどう龕燈を照らし東西南北四方に向かつて四つの隊は発足した。

愛児を失ったホーキン氏は自一隊みずからを引率し、海岸に添って南の方へ飛ぶようにして、下って行つた。

行けども行けども密林である。眼を覚まされた鳥や獣がさも怒りに堪えないようにけたたましい鳴き声を響かせ時々一行に飛び掛かつて来た。サーツサーツサーツと生い茂った雑草を分

けながら隊の行く手を横切るものがあつたが、云うまでもなく大蛇である。

一時間あまりも走つた時、一行は小広い空地へ出た。

と、ホーキン氏は立ち止まつた。

「しまつた」

と小声で叫びながら空地の一所へ走つて行き体を曲げ手を伸ばし地上から何か拾い上げたが、松火の火ですかして見ると、

「やっぱりそうか！ もう駄目だ」

こう云つて愁然と眼を垂れた。拾い上げたのは小さい帽子で、紛まごうべくもないジョンの物だ。

帽子に着いている血の染しみと、急拵しむえの石の竈かまどと、その傍わきに落ち

ていたセリ・インデヤ人の毒矢とを見れば、ジョン少年の運命は知れる。チブロン島の土人どもが、こつそりここへ上陸し、竈を作り焚火を焚き、遠征隊の動静を密かに窺<sup>ひそ</sup>っていたところへ、ジョン少年がやって来たのだ。そうして殺されて食われたのだ。

ジョージ・ホーキン氏の悲しそうな様子は、部下の者達を皆泣かせた。獅子であろうと虎であろうとビクともしない大冒険家も、肉親の情には堪えられないと見え、顔も上げえず咽<sup>むせ</sup>んでいる。

その時、遙か北の方から、大砲の音が聞こえて来た。

一同は驚いて耳を澄ました。

するとまた一発聞こえて来た。

にわかにはホーキン氏は奮い立った。

「ドームへ！」

と一声号令を下すと、元来た方へ一散に、先頭に立つて走り出した。

ドームの露营地まで来て見ると、別に変わったこともない。天幕もそのまま立っている。搜索隊も帰って来ている。北へ向かった一隊だけがまだ帰っていないかった。

ものの半時間も経った頃その一隊も帰って来た。

そうして彼らは云うのであった。

「異形の軍船が五隻揃って湾を静かに上って行きました」と。

「大砲の音は？」

とホーキン氏が訊いた。

「やはり異形のその軍船から打ち出したものでございます」

「どこへ向かって打ったのか？」

「島へ向かって打ちました」

「チブロン島へ向かってか？」

「はい、さようでございます」

「ふうむ」

とホーキン氏は考え込んだ。解らないのが当然である。日本という東洋の国の紋太夫という海賊が船隊を率い大海を越え、こんな所へやって来ようとは、誰しも夢にも思い付くまい。

さて、それにしてもジョン少年はたして土人に喰われたであろうか？

## 五

チブロン島の海岸に近く、土人部落が立っていた。椰子や芭蕉なつめや棗の木などにこんもりと囲まれた広庭は彼ら土人達の会議所であつたが、今や酋長のオンコツコは、一段高い岩の上に立つて滔と々うとうと雄弁を揮ふるっている。

「……俺達の国は神聖だ。俺達の国土は穢けがれていない。俺達の国は土はかつて一度も外敵に襲われたことはない。……俺達の国は金持ちだ。黄金、真珠、輝きれ瀝きせい青、それから小判大判が山のように隠されてある。俺達セリ・インデアンは、祝福されたる神の児こだ。



そうして俺達のこの国はその神様の花園だ。それだのに無礼にもこの俺達と、俺達の大事なこの国とを、征服しようとする者があ  
る。それは色の白い毛の赤い欧羅巴人<sup>ヨーロッパ</sup>とか云う奴らだ。そうし  
てそいつらは海峡を隔<sup>へだ</sup>てた大陸の林に陣取っている。ちつとも恐  
れる必要はない。しかし決して油断は出来ない。鏃<sup>やじり</sup>を磨き刀を研  
ぎ楯を繕い弓弦を張れよ！」

この勇ましい雄弁がどんなに土人達を感心させたか、一斉に土  
人達は歓呼した。そうして彼らの習慣として広場をグルグル廻り  
ながら勇敢な踊りをおどり出した。

赤い鶉<sup>つぐみ</sup>が飛んで行った

そつちから敵めが現われた

矢をとばせよ、槍を投げよや

可愛い女達を守らねばならぬ

部落のため、島のため

家族のために死のうではないか

赤い鷓鴣が飛んで行った

そつちから敵があらわれた

彼らの唄う戦いの歌は森に林に反響した。勇ましい愉快な反響である。

その日が暮れて夜となった。土人達は篝火かがりを焚いた。血の色をした焰ほのおに照らされ、抜き身の武器はキラキラ輝き土人達の顔は真っ

赤に染まり凄愴の氣を漂わせた。

しかしその晩は変わったこともなくやがて、夜が明け朝となり太陽が華々しく射し出<sup>い</sup>でた。

この時一大事が持ち上がった。

島の北方ビサンチン湾へ、物見に出して置いたゴーという土人が、息<sup>いき</sup>急<sup>せ</sup>き切<sup>せ</sup>つて走<sup>は</sup>つて来<sup>き</sup>たが、

「大きな船が五隻揃<sup>ぞろ</sup>つてビサンチン湾へはいつて来<sup>き</sup>た」とかうい<sup>い</sup>うことを告<sup>つ</sup>げたものである。

「どんな船だか云<sup>い</sup>つて見<sup>み</sup>ろ！」

悠然と床<sup>しょうぎ</sup>几<sup>ぎ</sup>へ腰<sup>こし</sup>かけたままオンコツコ酋<sup>しゆ</sup>長<sup>ちやう</sup>はま<sup>ま</sup>ず云<sup>い</sup>つた。

「不思議な帆船<sup>せんぱん</sup>でござ<sup>ご</sup>います。見<sup>み</sup>たこともないよ<sup>よ</sup>うな不思議な船<sup>せんぱん</sup>

!

「どんな人間が乗り組んでいたな？」

「それが不思議なのでございます。私達と大変似ております」

「肌の色はどうだ白いかな？」

「いえ、あかがねいろ銅色でございます」

「そうか、そうして頭の髪けは？」

「それも私達と同じように真っ黒な色をしております」

「なるほど、俺達と同じだな」

オンコツコは腑に落ちないように、眼を閉つむつて考え込んだが、

急に飛び上がって叫び出した。

「集まれ集まれ皆集みんなまってくれ！ 伝説の東邦人がやって来た！」

そこで再び大会議が例の広場でひらかれた。そうしてオンコツコは岩の上へ突つ立ち、再び雄弁を揮うことになった。

「俺達の先祖はいい先祖だ。立派な国を残してくれた。しかし一方俺達の先祖は悪い予言を残してもくれた。ある日ある時東邦人が、五隻の船に乗り込んでこの国へやって来るだろう。そうして謎語めいごを解くであろう。そうして紐を解くであろう。そうしたら国中の財産を東邦人へくれなければならない。……こういう予言を残してくれた。今、どうやらその連中が船へ乗って来たらしい」

この酋長の言葉を聞くや土人達にはわかつなみに騒ぎ出した。あつちでも議論こつちでも議論。広い空地は土人達の声で海嘯つなみのように騒がしくなった。

「東邦人を追つ払え！ 宝を渡してたまるものか！」

「東邦人が利口でもあの謎語めいごを解くことは出来まい」

「たとい謎語は解くにしても、あの紐だけは解くことは出来まい」  
「とにかく充分用心しよう。少しの間様子を見よう」

最後の議論が勝ちを占めた。しばらく様子を見ることになった。  
やがて三日が過ぎ去った。東邦人はやって来ない。と云つて五  
隻の軍船いくさぶねが湾から外海へ出ようともしない。現状維持とい  
ふところだ。

と、事件が持ち上がった。物見をしていた土人のゴーが東邦人  
に捕らえられたのである。

## 六

オンコツコは憤慨したが、相手が名におう伝説にある東邦人というところから、どうすることも出来なかつた。

こうして、またも数日経つた。その時、船から使者が来た。その使者こそは、他ならぬ来島十平太その人であつて、案内人はゴ―であつた。

酋長オンコツコは熟慮した後、その十平太と逢うことにした。通弁の役はゴ―である。

「我らは東邦の君子国、日本という国の軍人でござる」まず十平太はこう云つた。

「それには何か証拠がござるかな？」オンコッコも負けてはいない。

「証拠と申して何も無いが、東邦人には相違ござらぬ」十平太は昂然こうぜんと云う。

「それはそれとして何用あつて我らの国へは参られたな？」オンコッコは突つ込んだ。

「交際まじわりを修め貿易をなし利益交換を致したいために」

「東邦人に相違なくば、祖先より伝わる数連の謎語と、固くむすぼれた不思議な紐とを、何より先にお解きくだされい。修交貿易はその後のこととござる」

「ははあさようか、よろしゅうござる。一旦船中へ取つて返し、



おんたいししょう  
御大将に申し上げ、改めて再度参ることに致す」

こう云い残して十平太は湾の方へ帰って行つた。ゴーも一緒に従ついて行く。どうやらゴーは土人などより東邦人の方が好きになつたらしい。

翌日数十人の東邦人が土人部落へやって来た。小豆島紋太夫と十平太とが部下を従えて来たのである。と、酋長のオンコツコはこれも部落中の土人を従え例の広場へ出張つて来た。

「拙者は小豆島紋太夫。東邦人の頭領でござる」

「拙者はオンコツコと申すもの。チブロン島国の酋長なのでござる」  
こう両軍の大将は物々しげに宣り合つた。

「何か謎語めいごがござる由よし、拙者必ず解くでござろう」自信あり気に

紋太夫は云う。

「しからばこなたへおいでください」

こう云つてオンコツコは歩き出した。十平太初め部下の者が紋太夫の後から続こうとするのを、オンコツコは手で止めた。そうしてたつた二人だけで林の中へ分け入った。ただし通弁のゴーだけは従いて行かなければならなかつた。

三人はずんずん進んで行く。

林の中は薄暗くそしてほとんど道がなかつた。しかし豪勇の紋太夫はびくともせず進んで行く。

行く手に巨岩が立っていた。数行の文字が刻り付けられてある。

「これでござる」

と云いながらオンコッコは足を止め、指で石文字を差し示した。

この地上に一物あり

四脚にして二脚にて、三脚なり

しかして声は一あるのみ

四脚を用いて歩む時、彼の歩行最も遅し。

こういう意味のことが刻<sup>ほ</sup>り付けてあつた。

「その一物とは何物じゃな？　もしこの謎語を解くことが出来れば、大岩自然に左右に開く、とこう伝説に云われております。その一物とは何物じゃな？」

酋長オンコッコは得意そうに云つた。

「何んだ詰まらないこんな事か。よろしいすぐに解いて進ぜる」

紋太夫はカラカラと笑つたものだ。

「聞け、よいかさあ解くぞ。そもそも人間というものは、赤児あかごの時分には四つ脚がある。手が脚の用をするからじゃ。壮年時代に至つては云うまでもなく脚は二本だ。老人となつて杖を突く、すなわち脚は三本となる。四つの脚を働かせて這い廻っている赤児時代に、人間は一番歩行が遅い、人間には声は一つしかない。謎の一物とは人間のことじゃ！」

こう叫んだそのとたんに、岩に刻られた文字が消えた。

そうして岩が二つに割れ、左右へ開いて道を作つた。道のあなに社殿がある、古びた小さい社殿である。

「一つの謎はこれで解けた。さあこんどは二番目だ」

酋長オンコツコは胆を潰したが、こう云つて社殿の方へ走り出した。

社殿の棟から太い紐が長々と地の上に垂れていた、それは細い細い女の髪の毛を、千八重ちやえに結んで出来た紐で、たといどのよう  
に根気よく幾年かかつて解こうとしても人間業では解けそうもない。

「さあこの紐を解くがいい、細い髪の毛をバラバラに、一本一本解くがいい」

オンコツコは怒鳴り出した。

「うむ、これか」と云いながら、紋太夫は紐を握つたが、「一本解けばよいのか？　バラバラに解けばよいのだな？」

「一本一本バラバラに解いて、それが神の御旨みむねに適かなえば社殿の奥から鈴が鳴る筈じゃ」

「よし心得た」と云つたかと思うと、紐を小脇かに抱い込んだ。

## 七

と、やにわに腰の太刀を掛け声も掛けず引き抜いたが、そのままさつ颯と切り付けた。髪さつのより紐なは中央なかばから断たれ、結なぼれていた髪さつの毛は瞬間にバラバラに解けてしまった。その時はたして社殿の奥からカラカラカラカラと鈴の音がした。

「おお鈴の音がする鈴の音がする。神かみがご嘉納かなされたと見える」

オンコツコは仰天し、思わず両手を天へ上げたが、にわかにか叫びながら社殿の格子戸を引き開けた。と、内陣の板の間に老土人が一人眠っていた。そうしてその側そばに少年がいた。しかし土人の子供ではない。白い肌、青い眼、黄金色の髪、紛れもないそれは欧羅巴ヨーロッパ人で、他ならぬそれはジョン少年であった。そうしてジョンは鈴の紐を両手に握って振っていた。そのつど鈴はカラカラと鳴る。

「こやついったい何者だ！」

オンコツコは怒鳴りながら、ジョン少年を睨にらみ付けたが、老土人の側へツカツカと進み、

「起きろ起きろバタチカン」こう云って肩を揺すぶった。

バタチカンと呼ばれた老土人は、眼を覚ましてムツクリ起き上がったが、

「おおこれは酋長様で」

「こやついったい何者だな？」ジョン少年を指差した。

「ああその子供でございませうかな。欧羅巴ヨーロッパ人の子供だそうで」

「それでは俺達の敵ではないか」オンコツコは顔をしかめ、

「いったいどこから捕らえて来たのだ？」

「ドームの森の附近ちかくだそうで」

「誰がいったい捕らえたのだ？」

「物見に行った仲間達で」

「何故俺達の敵の子を神聖な社殿などへ隠匿かくまうのだ？」



「あまり不愍ふびんでございましたから」

「不愍とは何んだ。何が不愍だ」

「この子を捕らえた仲間達は、戦勝を祈る犠牲にえだと申して、この子を神の拝殿の前で焼き殺そうと致しました、見るに見かねてこの私が命乞みむねいを致したのでございます。私は祭司でござります。神の御旨みむねはこの私が誰よりも一番存じております。神は助けよと申されました」

祭司バタチカンはこう云いながらジョン少年を引き寄せようとした。

酋長オンコツコは月形をした長い太刀を引き抜いたが、左の腕でジョン少年を捕らえ、自分の方へ引き寄せた。怯おびえて泣くジョ

ン少年。バタチカンはひざまずいて何やらブツブツ云い出したのは神へお祈りでもするのであろう。

オンコツコは力をこめてジョン少年の胸の辺をえんげつとう偃月刀で突き刺そうとした。とにわかおちつに手が麻痺しびれた。

「お待ちなさい！」と沈着おちついた声。紋太夫が背後うしろに立っている。オンコツコの腕は紋太夫の手の中にしつかり握られているのであった。

「女子供には罪はない。女子供は非戦闘員でござる。助けておやりなさるがよい」紋太夫は静かに云った。

「お助けよとおっしゃるなら助けないものでもござらぬが、それには償いがいり申すぞ」オンコツコは憎さげに云う。

「拙者代わって償いましょう」

「この深い深い林の中を西へ西へと三里余り参ると一つの大きな巖窟いわやがござる。巖窟いわやの中に剣つるぎがござる」

「ははあそれではその剣を持って参れと云われるのか」

「さよう」とオンコツコは頷うなずいた。

「いと容易やすいことじゃ。すぐに参ろう」

こう云うと紋太夫は社殿から下りて林の中へはいつて行つた。

彼はズンズン進んで行く。

「ははあこれだな」

と呟つぶやきながら、大岩の前にたたずゝんだのは、それから三時間も経つ

た後で、永い永い南国の日も今は暮れて夜となっていた。

彼の眼前に大岩が——大岩というより岩山が、高さ数十丈広さ数町、峨々堂々として聳えていたが、正面に一つの口があつてそこから内へはいれるらしい。

「内は暗いに相違あるまい。松火を作る必要がある」

紋太夫はこう思つて、枯れ枝を集めに取りかかった。やがて松火が出来上がる。燧石を打つて火を作る。松火は焰々と燃え上がった。

で、紋太夫は元気よく、しかし充分用心して窟の内へはいつて行つた。道が一筋通じている。その道をズンズン歩いて行く。

やがて一つの辻へ出た。道が二つに別れている。紋太夫はちよ

つと考えてから左の方へ進んで行つた。道はきわめて平坦でそして天井も高かつた。しかし幅はかなり狭く、腕を左右に拡げると、指の先が岩壁へ届くのであつた。

## 八

紋太夫はズンズン進んで行く。

とまた辻へ現われた、道が四つに別れている。で、同じように左を取つて彼は躊躇ちゆうちよせず進んで行つた。行くにしたがつて次々にほとんど無際限に辻が現われた。そうして全く不思議なことには、二、四、八、十六というように、枝道の数が殖ふえるのであ

った。こうしてとうとう十回目の辻の前へ立った時、彼はすっかり当惑した。一千〇二十四本の枝道が別れているではないか！

「むう、さては迷宮だな」初めて彼は気が付いた。

「うかうか先へは進まれない。今のうちに引返すことにしよう」さすがの彼も心細くなり、元来た道へ引き返そうとした。しかしその時彼は一層当惑せざるを得なかった。どれも、これも同じような道である。今来た道がどれであるか全く見分けが付かないのであった。

「……………」彼は無言で立ち止まった。初めて恐怖が心に湧いた。

「この無数の枝道のうち戸外そとへ出られる道と云えば、今自分が通つて来たその道以外にはありそうもない。その他の道は迷路に相

違ない。むう、こいつは困ったぞ。戸外そとへ出られる肝心の道を俺はすっかり見失ってしまった。それをいちいち調べていた日には十日も二十日も掛かるだろう。食物がない。水がない。みすみす俺は餓え死ななければならぬ。土人酋長オンコツコめさては俺を計ったな！」

紋太夫は齒齧みをしたけれどどうすることも出来なかつた。

そのうちに松たいまつの火も消えた。四辺あたりは真まの如法によほう暗夜あんや。そうして何んの音もない。

紋太夫は生きながら地の中へ全く葬られてしまったのである。こうして幾時間か経たらしい。

その時一つの枝道の、奥の方から一点の赤い火の光が見えて来

た。

「おお」と思わず歡喜の聲が紋太夫の口から飛び出したのはまことにもつとものことである。いわば地獄での仏ほとけである。彼は勇氣を振り起こし、火の光の方へ走って行つた。近付くままによく見れば、そこは小広い部屋であつて、一人の女が火を焚いている。打ち見たところ土人の娘であるが、どことなく様子が違つている。紋太夫は側そばへ寄つて行つた。そうして手真似てまねで話し出した。

「あなたはいつたい何者です？　ここで何をしておられるのです！」

すると娘も覺おぼつか束ない手真似で、

「妾わたしは巫女みこでございます。ここが妾の住み家なのです」　こうよう



やく答えたのである。

「拙者は東邦の人間でござるが、計らず洞中へ迷い入り、歸りの道を失つてござる。あなたのご好意をもちまして洞窟外へ出るを得ましたら有難き仕合せに存じます」

「それはとうてい出来ませぬ」

これが巫女の返辞であつた。

「それはまた何故でござりますな？」

「何故と申してこの妾も、やはり出口を存じませぬゆえ」

「おおあなたもご存じない？」

「はい妾も存じませぬ。物心ついたその頃から妾はずつとこの洞内に起き伏ししておるのでございます」

「食物もなく水もなくどうして活いきておいでなさるな？」

「いえいえ水も食物も、運んでくださる方がござります」

「それは何者でござるかな？」

「妾は一向存じませぬ」

「ご存知ないとな、これは不思議」

「きつと妾のお仕えしている尊い尊い壺つぼがみさま神様がお運びくださる

のでござりましょう」

紋太夫は早くも聞き咎とがめた。

「何、壺とな？ 壺神様とな？」

英国の探険家ジョージ・ホーキン氏は、愛児のジョンを失った

ことを、驚きも悲しみもしたけれど、そこは冷静な英人氣質かたぎ、あ  
わても血迷いもしなかった。

彼は部下を呼び集め、今後の方針について物語った。

「我々の露営もかなり久しい。土人の様子もたいがい解った。平  
和手段では駄目らしい。で船を出し海峡を越え砲火を交じえて征  
服しよう。しかし、聞けば不思議な軍艦が、ビスンチン湾に碇泊  
し、やはり我々と同じようにチブロン島を狙っているようだ。ま  
ず使者を遣つかわして彼らと一応商議しようと思う」

「賛成」

と部下達は一斉に叫んだ。

そこで二十人の部下達は、後備少佐こうびゴルドンという勇敢な軍人

に引率され灣を指して出発した。

往復三日はかかるであろう。……こういう予定で出発したのが五日になつても歸つて来ない。で、不安には思つたけれど、待つてゐることも無意味だといふので、いよいよホーキン氏は全軍を率いチブロン島へ襲撃し土人と一戦することにした。

## 九

ホーキン氏の率いる遠征隊が、チブロン島へ上陸するや否や、土人の斥候が早くも見附け、ピューツと鋭い笛を吹いた。するとその笛は他の笛を呼び、さらにその笛は他の笛を呼び、次々に吹

き継いで、土人部落へ報告したらしい。

海岸へ上がるやホーキンは直ちに部下をただ一ひとつところ所に集めた。

「土人を殺すが目的ではない。彼らを威嚇し降参させ、財宝を発みつければ目的である。鉄砲は是非とも打たねばなるまい。しかし急所は避けるがよい。戦闘力を失わせる！これが最も肝心である。……では諸君進もうではないか！土人は毒矢を射るであろう。木立ちを楯に進むがよい」

まだ言葉の終らぬうちに、一斉に毒矢が降つて来た。

「林の中へ！」とホーキンは云つた。

遠征隊は一散に林の中へ飛び込んだ。棗椰子なつめやしや山毛櫨ぶなのきや棕櫚しゆる

の木などに蔽おおわれて林の中は暗かった。

「散つて！」とホーキン氏が叫んだので密集していた部下の者は二間の隔て<sup>へだ</sup>を置きながら左右へ翼のように拡がった。

毒矢は今では飛んで来ない。土人の姿も見ることが出来ない。全軍<sup>しゆくしゆく</sup>肅々と進んで行く。

深い林が浅くなり日光がキラキラ射し込んで来た。遙か前方に丘が見えた。そこに土人が集まっている。

「打て！」とホーキン氏が令を下した。と同時に火蓋<sup>ひふた</sup>が切られ白煙りがパツと立ち上がり木精<sup>こだま</sup>が四方から返つて来た。

三人の土人が地に仆<sup>たお</sup>れた。あわてふためいた余<sup>あと</sup>の土人は仆れた土人を抱きかかえ忽ち丘から見えなくなつた。

「左へ！」とホーキン氏が号令を掛けた。

全軍素早く左へ走り、敵に位置を知られないようにした。

突然その時背後うしろにあたって異様な叫び声が湧き起こり、同時に毒矢が降つて来た。案内知つた土人軍は早くも背後うしろへ廻つたと見える。

「止まれ！ 伏せ！」とホーキン氏は勇ましい声で命令した。部下達はバタバタと地へ伏した。そうして後方うしろをすかして見た。

土人の姿がチラチラ見える。いずれも刺ほりもの青で肉体を飾りそのある者は鳥の羽根を付け、そのある者は髑髏どくろを懸け、そうしてほとんど一人残らず毒矢を入れたやなぐい箆を負い、手に半弓を握っている。

「随意打て！」とホーキン氏は、全軍に令を下して置いて自分も銃の狙いをつけた。

パン、パン、パンという小銃の音は、忽ち諸方から響き渡り、その音に連れて土人どもは見る見るバタバタと仆れたが、彼らも獯猛のセリ・インデアン、容易に退しりぞこうとはしなかった。草に伏し木に隠れ岩を楯にし頻々と毒矢を飛ばせて来る。

その時、今度は丘の方からワーツという声が聞こえて来た。そうして毒矢が飛んで来た。

土人は挟み撃ちを試みるらしい。

遠征軍は隊を分かち、前後の敵に向かうことになった。そうして数人毒矢に当たったが、幸いに命は取られなかった。永い露営のその間に研究して置いた対症療養がこの時効を奏したのである。戦闘は発展しなかった。敵も味方も居坐ったまま矢弾やだまをポンポ



ン飛ばせるばかりである。

「これはいけない」とホーキン氏は鉄砲を打ちながら考えた。

「戦いが長引けば長引くほど味方の者を損ずるばかりだ。……一方の敵を打ち破り安全の場所へ引き上げることになしよう」

丘の土人軍を一掃し、丘を手中に納めるよう彼は全軍に命を下した。遠征隊は立ち上がり、一斉に喊声を上げながら丘へ向かって突進した。敵は頑強に手向かったが間もなく散々ちりぢりに逃げてしまった。

丘を占領した遠征軍は丘の背後うしろに空地があり、空地を取り巻いて土人の小屋が円形の屋根を陽に輝かせ、無数に建っているのを見て驚きもし喜びもした。

「ついでに部落も占領するがよい！」

ホーキン氏は銃を握り自身真つ先に駆け下りた。不思議のことには部落から毒矢一筋飛んで来ない。

部落は文字通り空<sup>からっぽ</sup>虚であつた。

少しの家畜と少しの食料、それを部落へ残したまま住民はすっかり逃げてしまつたらしい。しかし小屋は完全であつた。で、小屋にさえはいつていれば土人の毒矢を防ぐことが出来る。

「諸所へ歩哨を立てて置いて、全軍、小屋の中で休息させよう」  
ホーキン氏はそこへ気が附いた。

十人の歩哨を十方へ配り、その後で全軍は小屋にはいつた。不思議のことには土人どもは、追撃をして来なかつた。でのび

のびと遠征軍は小屋の中で休むことが出来、元気を恢復したのであつた。

## 十

やがて日が暮れ夜となつた。

歩哨の数を二十人に増し土人軍の襲来に備え、その他は小屋で眠ることにした。人々は皆疲労<sup>つか</sup>れていたのですぐさま深い睡眠<sup>ねむり</sup>に落ちたが、一人ホーキン氏は眠られなかつた。考えられるのはジョンの事で、兇猛無残の土人のために殺されたことには疑がないににしても、もしやどこかに生きてはいないか？ どこからか泣

き声でも聞こえはしないかと、何んとなく耳を澄まされるのであった。

「もう夜も大分更けたらしい。今、少しでも眠って置かないと、明日の戦いに差し支えるだろう。眠ろう眠ろう」

と云いながら心を落ち着け眼を閉じた時、

「お父様さん！ お父様さん！」

と紛れもない、ジョンの呼び声が聞こえて来た。

「おおジョンか！」

と飛び上がり、小屋の窓を開けて見た。

しかし戸外そとは月の光が蒼茫そうぼうと空地に流れているばかり、林や

森や土人小屋は、黒く朦朧もうろうと見えもするがジョンらしい少年の

姿は見えない。

「ジョンの事ばかり思っていたので、それでそんなように聞こえたのであろう。……殺されたジョンがこんな夜中に何んでこんな所へ来るものか」

……ホーキン氏は窓を閉じようとした。と、また紛れもないジョンの声が、手近の椰子やしの林の中から、「お父様さん！ お父様さん！」と聞こえて来た。

「おお！」とホーキン氏は驚いて、林の方へ耳を澄ましたが、「紛れもないジョンの声だ！ さては向こうの林の中に捕らえられているのかもしれない。……ともかく林まで行って見よう。ジョンよ！ ジョンよ！」

と呼びながら、用心のために銃を握り、小屋から戸外へ飛び出した。

空地を横切り部落を駆け抜け忽ち林へ分け入ったが、

「ジョンよ！ 私だ！ ジョンはどこにいるな！」こう呼んで耳を澄ましたが、林の中はしんと寂しく、木に当たる微風の幽かな音が耳に入るばかり、ジョンの声などは聞こえようもしない。

「それではやはり空耳かな？」疑がいが心に起こった時、

「お父様！ お父様！ 早く来てください！ 土人が私を殺します！ 恐ろしいお父様！」

こう呼び立てるジョンの声が林の奥から聞こえて来た。

「おおジョンか、すぐ行くぞよ！ 土人がお前を殺すって!! そ

の土人を撲なぐつてやれ！ お父様はすぐ行くからな！ その土人を撲なぐつてやれ！」

ホーキン氏は夢中で藪を分け、遮さえぎる木立ちを押しつけ押しのけ奥を指して走り出した。

「お父様！ お父様！ 早く来てください！ 土人は刀を抜きました。私の胸へ差し付けました！」

「神様神様お助けください！ おおジョンよすぐ行くぞよ！ その土人を撲なぐるがいい！ その土人を蹴かつてやるがいい！ どこにいる？ どこにいる？ ジョンよどこにいるのだ!!」

云い云い奥へ走つて行く。

「お父様。私は殺されます！ 土人は毒矢をつがえました。私の

頸くびを括くくつています！」

そういう声はだんだん幽かにだんだん奥へ遠ざかつて行く。

「ジョンよジョンよ失望してはいけない！ これもう一度お父様と云え！ もう一度お父様と云つてくれ！ すぐ行く！ すぐ行く！ すぐ行くぞよ！」

ホーキン氏はあたかも狂きちがい人のように、藪を潜り木立ちを分け、無二無三に走つたが、忽こっぜん然何者かに足を掬われドツとばかりに前へ倒れた。

ハツと驚いて飛び起きようとする。とたんにバラバラと木蔭からセリ・インデアンが二十人余り、獣のように飛び出して来たが、起きようともかくホーキン氏の上へ折り重なって組み附いた。二



十人に一人では敵かなうべくもなく、見る間にホーキン氏は縛り上げられた。

「むう、さては計略だったのか」

初めて気が附いたホーキン氏は、牙を噛むばかりに怒ったが、縛られた今はどうすることも出来ない。

喜んだのは土人達で、彼らは彼らの言葉をもって戦勝の歌を唄いながら、捕虜ホーキン氏を引つ立てた。

麦と燕からすむぎ 麦と椰子やしの実と

俺おいらの神様へ捧げよう

係わな蹄にかかった敵とりこの捕虜

神様の犠にえ牲に捧げよう

肉は肉、骨は骨

バラバラにして食おうじゃねえか。

ああ、ああ、ああ、

とりこ  
捕虜を殺せ！

十一

チブロン島の夜が明けて遠征隊は起き上がったが、隊長ホーキンの姿が見えない。

「きつと朝の散歩だろう。林の中へでも行ったんだらう」  
彼らは互いにこう思ってたいして心配もしなかったが、しかし

間もなく昼となり、そうしてとうとう晩になつてもホーキン氏の姿が見えないので、にわかには彼らはあわて出した。

こうして彼らは土人どもが何らか不思議な詭計きけいを設けて彼らの隊長ホーキン氏を昨夜のうちに誘おびきだ拐しどこか土人どもの本陣へ連れて行つたに相違ないと、こうようやく感附いたのはもうずつと夜も更けてからであつた。

「とにかく手を分けて探すことにしよう。ああしかしどうもとんだことになつた」

そこで彼らは全軍を三つの隊に分けることにした。一隊をもつて部落を守り、他の二隊は夜を冒して土人の本陣に向かうことにした。

南に向かった一隊の将は、チャンバレンという予備大尉で非常に勇敢な人物であり、北に向かった一隊の将はジョンソンという会社員上がりで思慮に富んだ人物であり、部落守備の隊長はマコーレーという人物で、生まれながらの冒険家でありホーキン氏にとっては片腕であつた。

各隊の人数は百人ずつで、いずれも決死の覚悟をもつて各《おのおの》の任務に ついたのである。

「みんな唄うがいい！ みんな踊るがいい！ 敵の大將を捕虜とりこにしたぞ！」

土人酋長オンコツコは、社殿の縁に突つ立ち上がり、さも得意

気に喋舌しやべるのであった。

「……最初俺達は敵の大將ホーキンの子供を捕虜とりこにした。そこで俺達は考えた。このジョンという子こせがれ倅せがれめをどうぞうまく囚おとりにつかつて敵の大將をおびき出したいとな。……そこでジョンをふん縛り部落近くへ連れて行きピシピシ鞭むちで撲なぐつたものさ。するとこつちの思惑通りジョンめ親父の名を呼んだものさ。そこで親父のホーキンめが一人でノコノコやって来た。それをだんだんおびきよせ、以前まえかた係蹄わなをかけて置いた林の奥まで引つ張り寄せ、そこでうまうま捉えたというものだ！ 何んと愚かな敵じゃないか！ 何んと利口な俺達じゃないか！ ……さあみんな唄つてくれ！ 大きな声で唄つてくれ！」

住み慣れた部落を惜し気なく捨ててここ社殿へ住居すまいを移した千人に余る土人どもは、この酋長の話を聞くと老若男女一斉にワツとばかりに喊声を上げ、社殿の周囲まわりを廻り出した。

体には刺青ほりもの、手には武器、頭や腰を羽毛で飾った兇猛無残の食人族が、不思議な身振り奇怪な手振りで、踊りつ唄いつ廻り歩く様子は、何んと形容しようもない世にも物凄い光景であつたが、しかし間もなくそれ以上の恐ろしい光景が展開された。

「もうよかろう引つ張り出せ！」

オンコツコが叫ぶと同時に社殿の扉が左右に開いて、まず現われたのはホーキン氏、次に引き出されたのはジョン少年で、二人ながら革紐かわひもで縛られている。

「その杭くいへ縛り附けろ！」

社殿の前の小広い空地に一本の杭が立っていたが、二人はそこへ縛り附けられた。

「さあそろそろやろうじゃないか。血を出せ血を出せ！　肉を削そげ肉を削げ！」

このオンコツコの合図と共に、社殿を廻っていた土人達は、杭の周囲まわりへ集まって来た。そうして二人の捕虜の周囲をグルグルグルグル廻り出した。そうして歌を唄い出した。

いよいよ虐殺が始まるのである。

彼らは捕虜を廻りながら、手に持っている槍や刀で捕虜の体を切るのであった。そうしてほとんど一日がかりでなぶり殺しにする

のであった。

今や一人の蛮人が、手に持っている両刃の剣で、ホーキン氏の腕を切ろうとした。とその刹那木立ちを通し一筋の征矢そやが飛んで来たが、その蛮人の拳に当った。

「あつ」と叫んで持っていた刀を手からポロリと取り落とす。とたんにドツと鬨とぎの聲が林の奥から湧き起こり、朝陽の輝く社殿を目がけ雨のように矢が飛んで来た。それが一本として空矢あだやはなく、生死は知らず二十人の土人バタバタと地上へ転ころがった。

「それ敵が征せめて来たぞ！」 「弓を射る槍を飛ばせろ！」 「敵は向こうの林の中にいるぞ！ 油断をするな油断をするな」

「踊りを止めて武器をとれ！」



「捕虜を攫さらわれない用心をしろ！」

「それ敵めが現あらわれたぞ！ 毒矢を射る毒矢を射ろ！」

土人どもは狼狽し、右往左往に立ち迷いながらもそこは勇敢なセリ・インデアン、襲い来る敵に立ち向かった。

その時またも林の中からドツとばかりに鬨こゑの聲が上り、ひとしきり征矢そやが飛んで来たが、忽ち人影が現われ出た。

先さきに立たつたは来島十平太で、後あとに続ついたのはゴルドン大佐、そうしてその後から雲霞うんかのように続々として現われ出いでたのはゴルドンの引率した二十人の兵と、十平太の率いた二百人の武士、しめて二百二十二人、日英同盟の勇士達であつた。

## 十二

ところでどうしてこれらの勇士達が忽こっせん然ぜんここへ現われ出で土人に向かつて攻撃を開始し、ホーキン氏親子の危い命を、間一髪に止めたかというに、それには次のような経路がある。

ゴルドン大佐はホーキン氏の命で、日本の海かいこう豪小豆島紋太夫と、同盟の相談をしようものと、往復二日の予定をもってドームの露营地を出発したところ、不案内の蛮地であつたがため予想外に日数がかかり、目指すビサンチン湾へ行き着いたのは実に五日目の真昼であつた。

しかるにこの時日本軍の方では、頭領小豆島紋太夫が土人部落

へ行つたまま、五日経つても帰つて来ず何の消息もないところから、来島十平太を大将としていよいよ土人の部落に向かい進撃しようとしていた時であつた。

そこで同盟はすぐとこのに整い、全軍五百のその中から二百人だけ選抜し、それへ英人二十人を加え、十平太とゴルドンが両大将となり、チブロン島を横断し計らずもここまでやつて来たのであつた。

今や日英同盟軍とセリ・インデアンとの戦いはまさに白熱の最中であつたが、いかに土人が勇敢であつてもとうてい日本武士には及ぶべくもなく次第次第に敗け色になつた。

土人酋長オンコツコは早くも味方の負け色を見ると、逃げ出すことに覚悟を決めたが、みすみすホーキン氏とジョン少年とを、

奪いかえされるのが残念と思つたか、刀を握つて走り寄り二人の傍へ近寄るや否や杭へ繫いだ繩を切り二人へ刀を突き付け、社殿の中へ連れ込もうとした。

しかるにこの時思いもよらず裏切り者が現われた。他でもない祭司のバタチカンで、彼は最初にジョン少年が仲間の土人に捕らえられ殺されようとした時に、命乞いをして助けて以来、ジョン少年が可愛くてたまらず、杭に繋がれたその時からどうぞして助けようと思つていたところ、今その機会がやって来たので、隠れていた社殿の扉を押し開き脱兎のように走り出て、オンコツコの側へ近寄るや否ややにわにジョンを横抱きにして林の中へ逃げ込んだ。

あつと驚いたオンコッコは、

「裏切り者だ！ 謀反人だ！ 早く早くバタチカンを捉らえろ！」

大声を上げて叫んだが、戦い最中のことではあり、誰とて耳に止めるものはない。そのうち早くもバタチカンの姿は木蔭に隠れて見えなくなつた。

「よしよし餓鬼がきは逃げるがいい。そのうちきつと捉えてやる。：こつこつたからには親父の方はどんなことがあつても逃がすことは出来ない。：：：さあ来やがれ！ さあ来るがいい！」

オンコッコは叫びながらホーキンの腕を引つ立て社殿の中へ連れ込んだ。

すぐにガラガラと扉を締とじる。

それからオンコツコはニヤニヤ笑い、柱の一所へ手を触れた。

と、恐ろしい音がして、ホーキンの立つている足の下へ忽然として穴が開いた。<sup>あ</sup>すなわち床板が外れたのであって、アツという間もあらばこそホーキンの体はもんどり打って深い深い地の底へ落ち込んだ。

「おいホーキン！ おい大将！　そこでゆつくり休むがいい。もつとも少し暗いけれどな。そうして少し<sup>かびくさ</sup>黴臭いけれどな。アツハハハゆつくり休みねえ。けれどあらかじめ云っておくがな、あんまりノコノコ歩き廻らぬがいい。うかうか歩くと迷<sup>まいご</sup>児になるぜ」

暗い穴の中を覗きながら、オンコツコは悪口を云った。それから外れた床板を箆めるとやがて扉<sup>と</sup>を開けて外へ出た。

戸外は戦いの最中である。

穴の底へ落ちたホーキン氏は幸い酷い傷も受けず、落ちた拍子に縄も解けにわかには自由の身になった。

「やれやれどうも酷い目に会ったぞ。おやおや手足が擦り剥けて  
いる」

呟き呟きホーキン氏は四辺の様子を探ろうとしてそつと立ち上がって歩いて見た。

「これが右だ。石の壁らしい。……これが左だ。やはり石壁か。  
……これが正面。これも石の壁だ。……さて背後はどうだろう？  
やはり石壁じゃあるまいかな？」

で、背後<sup>うしろ</sup>へ手をやって見た。スベスベとして酷く冷たい。石ではなくて鉄の壁らしい。

「鉄とあつては石壁よりまずい。おや、待てよ、変なものがあるぞ。……や、これは金<sup>かね</sup>の錠<sup>か</sup>だ！」

力をこめて捻<sup>ね</sup>じつて見た。金が腐つていたのであろう、何んの苦もなく捻じ切れた。とたんに鉄の扉がギーと開いて冷たい風が吹いて来た。

どうやら道でもあるらしい。



窟いわやの中の生活には昼もなければ夜もない。いつも四辺あたりは闇である。その闇々たる窟の中で、土人の巫女みこを話し相手として焚火たきびの火で暖を取り、小豆島紋大夫あずきじまは日を送った。

会話と云つても手真似てまねである。その覚束おぼつかない手真似をもつて、ようやく紋太夫が聞き出したのは、壺神様つぼがみさまの事である。

「この窟の奥、五里も八里も隔へだたっている遠い遠い窟の奥に、壺神様の神殿がおりなさるのでございます。そうしてそこには蛇使いの恐い恐いお婆さんが、沢山の眷族けんぞくを引き連れて、住んでいるようでございます。壺神様のご神体つるぎは剣だそうでございます。それもただの剣ではなく、活き剣だそうでございます。物を云つたり歌を唄つたり歩いたりするようでございます。恐い蛇使いの

お婆さんは、神かんぬし主なのでございます」

これが巫女みこの話であつた。紋太夫は早くも感付いた。

「土人酋長オンコツコめが、俺に取つて来いと云つたのは、この活き劍の事だつたのか。取つて来いなら取つても来よう。活き劍とは面白い」

で、手真似てまねで巫女みこに訊いた。

「壺神様の神殿へはどう行つたらよいのかね？」

「奇数、偶数、奇数、偶数と、こう辿つておいでになれば、参られるそうではございますが、しかし行く事は出来ませんまい」

「何故行くことが出来ない？」

「行く道々悪者どもが蔓延はびこっているそうでございます」

「とにかく私は行くことにしよう」

「これまで沢山の人達がその活き剣を取ろうとして、幾度行つたか知れませぬ。けれどそのうち一人として帰つて来た人はござりませぬ。恐ろしい所でございます。決しておいでなさいますな」  
巫女は熱心に止めるのであつた。

「私は東方の君子国日本という国の侍じや。恐ろしいということ知らぬ者じや」紋太夫はカラカラと笑い、「一旦行くと云つたからはどうでも一度は行かねばならぬ。これが武士さむらいの作法なのじや。巫女みこ殿まことに申しかねるが、一日分の食糧さむらいと松火たいまつとを頂戴出来まいかな」

「どうでもおいでなされますか」

「活き剣を手に入れてきつと帰つて参りますぞ」

そこで松火と食物とを巫女の手から貰い受け、紋太夫は元気よく出立した。

ものの十町と行かないうちに無数の枝道が現われた。

「奇数、偶数、奇数、偶数、こう辿ればいいのだな。一は奇数だ、云うまでもなくな。……一の道を行つてやろう」

一番手近の枝道を彼はズンズン進んで行つた。とまた無数の枝道へ出た。今度は手近から二番目の道を——偶数の道を進んで行つた。奇数、偶数、奇数、偶数、これを繰り返し繰り返し紋太夫は先へ進むのである。

行く手は暗々たる闇であつたが手に松火たいまつを持っているので

道を間違える心配はない。

半刻余りも歩いた頃、遙か行く手の闇を染めて薔薇ばらいろ色の光が射して来た。

「ははあ、何者かいるらしい。いずれ悪者の仲間であろう」

つぶや

呟きながら紋太夫は足早にそっちへ進んで行った。はたして一

人の大男が、狭い坑道に立ちはだかり、豪ごうぜん然と焚火たきびに当たって

いたが、紋太夫を見ると、手を拵げ、大きな声で叫び出した。何の事だか解らない。

そこで紋太夫は十八番の手真似をもつて話しかけた。

「何用あつて俺を止めた」まずこれから食つてかかる。

「見れば見慣れない人間だが、貴様はいつたい何者だ？」大男は

聞き返した。

「俺は東邦の人間だ。壺の神の神殿へ行く」

「おお行きたくば行くがよい。しかしその前にこの関門を、貴様  
どうして通るつもりだ」

「関門とは何だ？ 何が関門だ？」

「すなわちここが関門よ。そうして俺こそ関せき守もりよ」

「関門であろうと関守であろうと、俺は腕うでづくで通つて見せる」

「腕うでづくでは駄目だ、智恵で通れ」

「お面白い。何でも尋たずねろ。紋太夫即座に答えて見せる」こう  
云うとポンと胸を打った。

「それ訊きくぞ。答えろよ」大男はニヤリと笑った。

「使えば使うほど殖えるものは何んだ？」

「へん、べらぼうめ。そんな事か。他でもねえ人間の智恵だ。さあドシドシ訊くがいい」紋太夫は大得意だ。

「形がなくて声がある、早く走るけれども足がない。これは何んだ、当てて見ろ」

「いよいよ益　愚劣だな。それは風と云うものだ。さあ何でも訊くがいい」

「だんだん肥えてだんだん痩せる。死んでも死んでも生まれるものは何んだ？」

「智恵のねえ事を訊きやあがるな。それはな、空のお月様だ」

## 十四

「さあ今度は貴様が訊け」大男はどうとう我を折った。

「よし訊くぞよ、答えるがいい。……大きくて小さく、形あつて形ない。これは何んだ？ さあ答えろ！」

紋太夫はだいかつ大喝した。

「むう」と云つたが大男は返辞をすることが出来なかつた。

「どうだ？」と紋太夫は嘲笑い、「返辞が出来ずば関を通せい」

「仕方がねえ。通るがいい」

大男は片寄つた。そこを眼かけて駈け抜ける。

「大きくて小さく、形あつて形なし、——どうも俺には解らねえ。



「いったいこれは何者だな？」

大男は訊いたものである。

「実は俺にも解らねえのさ！ そんな物は世にあるまい。アツハハハ」と駈け過ぎる。

「いやはや馬鹿な奴ではある。うまく一杯食いおつたわい」

こう心地よげに呟きながら、松たいまつ火の光で道を照らし先へ先へと進んで行つた。

とまた遙か行く手に当つて蒼白い光が見えて来た。近付くままによく見れば、肥えたせむし傴僂としよりの老人が岩に一人腰掛けている。背うしろ後の岩壁をく削り抜いてそこに灯皿ほげらが置いてあつたが、そこで灯つている獣油の火が蒼然と四辺あたりを照らしている態は、鬼々陰々たるさま

ものである。

と見ると老人としよりの足もとに深い穴が掘つてある。

消え入るような悲しそうな声で何やら老人は話しかけた。しかし紋太夫には解らない。彼は手真似で訊き返した。

「足を洗わせてくださいませ」こう老人は云つていたのであつた。

「諸人の足を洗うのが私の役目でござります。罪障消滅のそのために足を洗わせてくださりませ」繰り返し老人は云うのであつた。

「変わった事を云う奴だな。これは迂濶うかつには信じられぬ」心中怪しく思いながら、紋太夫は思案した。「岩から泉水いずみが流れている。

ははあこの水で洗うのだな。……ここに深い穴がある。穴！ 穴

！これが怪しい」

この時忽然彼の心へ、老人の姦計が映つて見えた。「ううむそ  
うか。よく解つた。そつちがそういう心なら、こつちはその裏を  
搔いてやろう」

つと紋太夫は片足を老としより人の前へ突き出した。とたんに老人は  
膝を突き、その足首を掴んだが、真つ逆さまに紋太夫を穴の中へ  
投げ込もうとした。

「えい！」と云う裂れっぱく帛はくの聲、紋太夫の口から※ほとばしると見るや、  
偃せむし偻の老人の小さい体は、幾十丈幾百丈、底の知れない穴の中へ  
もんどり打つて蹴落とされた。

「人を咒のろわば穴二つ、いい気味だ、態さまア見ろ」

じつと穴の中を見込んだが、文目あやめも知れぬ闇の底から冷たい風

が吹いて来るばかり、老人の姿は見えなかつた。

「なるほど巫女の云つた通り、小気味の悪い悪人どもが到る所に蔓延はびこっているわい」——油断は出来ぬと心を引き締め、松たいまつ火の火を打ち振り打ち振り紋太夫は進んで行く。

奇数、偶数、奇数、偶数！——幾百ないし幾千本、どれほど枝道が現われようと、彼は驚きはしなかつた。奇数、偶数と行きさえすれば迷う心配がないからである。

今の時間にして十時間余り、道みちのり程にして十二、三里、紋太夫は歩いたものである。その時洞然どうぜんと打ち開けた広い空地が現われた。それは空地と云うよりもむしろ一個の別天地であつた。丘もあれば林もあり人家もあれば小川もある。螢の光か月光か、蒼

澄んだ仄ほのかな 微うすびかり光が、茫然と別天地を照らしているが何んの光だか解らない。

どこからともなく人声がする。と歌声が聞こえて来た。その歌声を耳にすると紋太夫はアツと仰天した。日本の言葉で日本の歌を鮮かに歌っているからであつた。

「おおここには日本人がいる！ ここはいつたいどこだろう？」

夢に夢見る心地と云うのはこの時の紋太夫の心持ちであろう。

歌声は益 はつきりと、益 美しく聞こえて来る。紛れもない日本の歌だ。

「ここはいつたいどこだろう」

紋太夫は感にたえ思わず繰り返して呟いた。しかり！ ここは

どこだろう？

壺神様を奉安した神秘崇厳の神境なのである！

壺神様とは何物ぞ？ それには一場の物語がある。

十五

昔々遙かの昔に、メキシコ墨西哥の国ガイマスの地にガイマス王という国王があつた。その王子を壺皇子と云つたが、早く母上と死に別れ、ままはは継母の手で育てられた。多くの継母がそうであるようにこの継母も継子を憎みどうぞして壺皇子を殺そうとした。

壺皇子八歳の時であつたが、天変地妖相継いで国内飢餓に襲わ

れた。その時継母は国王に云った。

「神のお怒りでござります。神様が何かを怒らせられ飢餓を下されたのでござります。大事な宝を犠牲にえとして、お怒りを和なだめずばなりませんまい」

「犠牲にえには何を捧げような？」

「一番大切な宝物を」「一番大切な宝物とは？」「壺皇子をお捧げなさりませ」

「なるほど俺わしの身にとって皇子より大事なものはない。皇子を捧げずばなるまいかな」

「皇子を犠牲となされずば神の怒りは解けますまい」

「人民のため国家のため、それでは壺皇子を捧げる事にしよう」

王は悲しくは思いながらも継母の甘言に心迷い壺皇子を犠牲にすることにした。

祭壇が築かれ薪木たきぎが積まれ犠牲を焚く日がやって来た。八歳の壺皇子がそれとは知らず嬉々として祭壇へ上った時火が薪木へ掛けられた。しかし神は非礼を受けず忽ち奇蹟を現わされた。忽然巨大な一振りの剣つるぎが雲の中から現われ出たが、まず継母の首を斬り、次いで壺皇子を束つかへ乗せ、どことも知れず翔かけ去ったのである。

剣は皇子を乗せたままチブロン島まで翔けて来たが、そこで一旦地上へ下り、さらに虚空を斜めに飛び窟いわやの中へ飛び込んだ。

この神秘境へ来たのである。



活ける劍は窟の中で壺皇子を人知れず養育した。皇子の寂寥を慰めるために人界から人間を連れて来た。その人間は次第に殖え、ここに部落を形かたちづく成つた。

そこで壺皇子はその部落の帝王として君臨した。

部落は平和に富み栄え、壺皇子は数百年活き延びたが、天寿終つて崩御ほうぎよするや、人民達はその死骸なきがらを林の中へ埋葬し神に祀つて壺神様と云つた。御神体は活ける劍である。

その後部落は一盛一衰、幾多変遷はあつたものの、今に及んで絶えることなく、不思議な国家として存在した。——以上は島の土人によつて、今も語られる伝説なのである。

それはそれとして、部落の中から、日本の歌の聞こえるのは何

んと解釈したものであろう？

「何んという不思議なことだろう？」

小豆島紋太夫はたたず佇んでしばらく歌声に耳を澄ました。

「歌の主を探し当てよう。それが何よりの急務である」

——で、紋太夫は足を早め、声のする方へたど辿って行った。

行くに従って歌声は次第にハッキリ聞こえて来た。歌の文句も聞き取れた。

「あれは万葉の古歌ではないか。これはどうでも歌の主は日本の人間に相違ない」

こう考えて来て紋太夫は怪しく心の躍るを覚えた。彼はとうとう駈け出した。

林の中へはいった時、石に腰かけた土人老婆が、無心に歌をうたっているのを、うすびかり微光の中に見て取った。

「や、日本の人間ではない！」

紋太夫は叫んだものである。と、老婆は歌を止め、紋太夫をつくづく眺めたが、りゆうちよう流暢な日本語で話しかけた。

「おおあなたは日本人ですね」

「さよう、私は日本人」

「助けてください助けてください！」

老婆は大地にひざまずき、日本流に合掌した。

「助けてやろうとも助けてやろうとも、しかし何を助けるのです」

「妾は聖典を盗まれました」

「何、聖典！ 聖典とは？」

「それには諸 《もろもろ》の尊い智恵が記されてあるのでございます」

「そうして誰が盗んだのだ？」

「はたごや旅籠屋の主人でござります」

「その旅籠屋はどこにある！」

「林の奥でござります」

「では俺が取り返してやろう」

「どうぞお願い致します。どうぞお願い致します」

「それにしても不思議だな。どうして日本語を知っておるな？」

「それには訳がござります。いずれお話し致します。聖典をお取

り返してくださいませ」

「心配するな。取り返してやる」

紋太夫は林を分け奥へ奥へと進んで行つた。

「重ね重ね不思議なことだ。いろいろの事件にぶつかるわい」  
行つても行つても深い林は容易に尽きようとはしなかつた。

## 十六

建物の様子でそれと知れる土人旅籠はたごの前まで来た時、その戸口から一人の土人が、笑いながら現われた。筋骨逞しい若者である。

何か紋太夫へ話しかけたが、土人語で要領を得ない。

そこで、度々の経験で、今はすっかり熟達している、例の手真似で紋太夫はその若者へ話しかけた。

「お前の所は旅籠屋かな？」 「はいさようでございます」

「どうだ俺を宿とめてくれぬか？」 「どうぞお宿まりくださいますよう」

「どんな物を食わせるな」 「いろいろご馳走致します」

「で、上等の部屋はあるか」 「聖典の間へお宿めしましょう」

「聖典の間？ おおそうか」 紋太夫は頷うなずいた。

「では俺を宿めてくれ」 「さあ、おいでなさりませ」

若者の後に従って紋太夫は家内なかへはいつて行った。はいつた所に部屋があり、部屋には無数の土人がいた。ガヤガヤ喚きながら

酒を飲んでゐる。残忍酷薄な表情をした見るから恐ろしい土人どもである。

それからさらに二つ三つ大きな部屋を通つたが、やがて通された部屋を見ると、別に変わったこともない。床と天井とが石で出来ている。床に巖丈な寝台がある。寝台の側そばに卓があり、その上に書物ほんが載せてある。羊皮紙で作つた厚い書物で、表紙には漢文字で「明智篇」と記されてある。

「はてな」と呟くと紋太夫はまず寝台へ腰を下ろし、それから書物ほんを取り上げた。書かれてあるのは漢文であつた。

「范邸はんたいは浚儀しゆんぎの令たり。二人絹を市さしはさに挟み互いに争う。令これひそを両断し各一半を分ちて去らしめ、後人を遣わして密かにこ

れを察せしむ。一人は喜び、一人は慍いきどおる色あり。ここにおいて喜ぶ者を捕らう。はたして賊也」

「魏りけいの李惠、雍州ようしゅうに刺史たり、薪を負う者と塩を負う者とあり。同じく担たんを弛ゆるめて樹蔭に憩う。まさに行かんとして一羊皮を争う。各背せなに藉しける物と言う。惠がいわく、これ甚だ弁じ易しと。すなわち羊皮を席上に置かしめ、杖をもつてこれを撃うつ。塩え屑んせつ出いず。薪を負う者すなわち罪に服す」

「相伝あいつたう、維亭いいていの張小舎、善よく盗とうを察すと。たまたま市中を歩あく。一人の衣冠甚だ整いたるが、草を荷になう者に遭うて、数莖を抜き取り、因よつて厠かわやにゆくを見る。張、その出いずるをまつて、後ろよりこれを叱しつす。その人惶懼こうくす。これを掬きくすれば盗なり」



「またかつて暑月において一古廟の中に遊ぶ。三、四輩あり。地にむしろ蓆してかんすい鼾睡す。傍らに西瓜あり。劈開して未だ食わず。張また指さして盗と為してな擒う。はたしてしかり。ある人その術を叩く。張がいわく、厠に入るに草を用う。これ無頼の小人。その衣冠も必ず盗み来たるもの。古廟に群がり睡るは、夜勞して昼疲る。西瓜をつんざ劈くはもつて蠅を辟くるなりと」

「なるほど」と紋太夫は呟いた。

「支那の昔の賢人の逸話を書き集めた書物と見える。昔の人は利口であつた。……老婆の話しの聖典とは恐らくこの書物のことであらう。この書物をさえ手に入れればここに止どまる必要はない」

紋太夫は立ち上がった。それからツカツカと戸口へ行つた。戸

には錠が下ろされてある。外から下ろされているのである。見廻すと一つ窓があつた。

彼は窓へ飛んで行つた。窓にも錠が下ろされてある。外から下ろされているのである。彼は捕虜とりこにされたのだ。完全に監禁されたのである。

彼は思わず唖つたが、どうする事も出来なかつた。再び寝台へ腰を下ろし、心を静めて考えようとした。その時、石の天井が徐々として下へ下がつて来た。

「あつ」と紋太夫は声を上げた。「南無三宝！ 計られた！ さてはおしころ圧殺すつもりだな」

石の天井はきわめて静かに下へ下へと下りて来る。間もなく天

井は下りきるであろう。彼はあつさつ圧殺されるであろう。どこからも遁のがれる道はない。手を空むなしゆうして殺されなければならない。

## 十七

陰気な、鈍い、気味の悪い、キ——という軋ねり音を立てながら、一刻一刻、徐々として、釣天井が下がって来る。重い重い釣天井だ。それにお圧されたら命はない。平目ひらめのように潰されなければならない。  
らない。

豪勇小豆島紋太夫もどうすることも出来なかった。「俺の命もここで終えるか」——こう思うと残念ではあつたが、遁がれ出る

ことも出来そうもない。床は部厚の石畳であり四方の壁も石である。たった一つの戸口の扉には外から門かかぬきがおろされてある。……キー、キー、キー、キー、天井はなかば央まで下りて来た。

紋太夫は切齒したものの、坐っていることが出来ないの、びったり石畳へ横臥した。間もなく天井は部屋の高さの三分の二まで下がって来た。しかも尚も下がり止やまらない。やがて紋太夫は背の辺へ天井の重さを感じるようになった。とうとう天井が彼を殺すべく背まで下がって来たのである。

「もういけねえ」と紋太夫は観念の眼を堅く閉じた。「大日本国の武士ものが、異国も異国南米の蛮地の、しかも不思議な窟いわやの中の目の見ない妖怪国で、野蛮人どもの姦計に落ち、釣天井に圧殺

されようとは！ 無念も無念、残念ではあるが、これも、天命の  
しからしむるところか。——あ、苦しい！ 息詰まるわい！」

もう一押し押されたなら、紋太夫の体はひとたまりもなく、粉なみじん  
微塵になろうと思われた。と、その時、彼の寝ている厚い石畳  
の真下に当たって、コツコツコツコツと音がした。

こういう危険の場合にも、紋太夫は正気を失わない。「はてな  
？」と耳を傾むける。

コツコツコツコツとその音は、次第次第に高くなつたが、ザー  
ツと土でも崩れるような騒がしい音が聞こえたたん、グラグラ  
と、石畳は左右に揺れ、そのままドーンと下へ落ちた。あつ！

と思う暇もない、紋太夫の体は宙を飛んで、どつと床下へ落ちた

ものである。

「ああ助かった！」

と紋太夫は、思わず歡喜の声を上げ、忙がしく四辺あたりを見廻すと、石畳の外れた跡の穴から、仄々ほのぼの射し込む光に照らされ、朦朧もうろうと四方あたりは明るかったが、見れば自分のすぐ側に一人の男が立っている。

土人でもなければ日本人でもない。長崎あたりでよく見掛ける、それは西洋の人間であつたが、いかにも意外だと云うように紋太夫の顔を見守っている。これぞ他ならぬジョージ・ホーキン氏で、同氏が酋長オンコツコのため神殿の床下へ押し込められたことは、すでに説明した筈であるが、その後同氏はその床下に地下道のあ

ることを発見し、死中に活路を得ようものと無二無三に突き進んだ結果、ほとんど一昼夜を費したところで、その地下道がこの地点で行き詰まったことを発見した。そこでふと天井を眺めて見たと、平石が並べてある。長い年月を経たものと見えて石と石とのその間にわずかながらも隙間があつて、そこから光が洩れていたのでさては地上へ出られようも知れずと、饑えと、乾きと疲労とで、弱っているにも拘らず夢中で土を掘つたのであつた。果然平石が落下して、穴の開いたのはよいとして、それと一緒にいとも凜々しい立派な人間が落ちて来ようとは思ひ設けないことであつた。

その落ちて来た人間が、土人でもなければ自分の味方でもなく、

東洋の武士だもののふということが一層彼を驚かせた。

紋太夫はつと進んだ。

「これはどなたか存じませぬが、あぶないところをお助けください何んとお礼を申してよいやら、私事は日本の武士小豆島紋太夫にござります」

こううやうや恭しく云いながら丁ていねい寧に腰をかがめたけれど、英国人の

ホーキン氏にそれが解ろう筈がない。でホーキン氏は当惑してただ黙って立っている。しかし人間の感情は、日本人であれ英国人であれ、大して変わるものではない。で、ホーキン氏は手真似を加え、それで和蘭語オランダゴや西班牙語スペインゴや、知っている限りの言葉まじを雑え、



「私は英国の探険家ジョージ・ホーキンと申すもの、お見受けすれば何事か恐ろしい事件の起こられた様子、事情お話しくださいませよう」

ところが、小豆島紋太夫は、かつて長崎の和蘭人オランダじんから、久しく和蘭語オランダごを学んだことがあつて、会話ぐらいには事を欠かなかつた。そこで忽ち二人の者は、お互いの遭難を語り合うことが出来た。話し合つて見れば同じような境遇、親しくならざるを得なかつた。

「釣天井で圧殺とは、聞いただけでも身が縮すくむ。無残なことをする奴らだ」

ホーキン氏もさもさも驚いたように歎息しながらこう云つたが、

「これは捨てて置かれない。是非とも復讐をしなければならぬ」  
「さよう、復讐をしなければならぬ」紋太夫は頷いて、「石畳が  
落ちた後の穴から、屋上へ二人躍り出て土人どもを撫で切りにす  
るか。それともきやつらが結果を案じ、いずれ地下道へ下りて来  
るであろうが、そこを待ち受けて討ち果たすか、さあどつちがよ  
かろうな」

## 十八

「敵は大勢、味方は二人、広場へ出ては敵かないそうもない。きやつ  
らが地下道へ来るのを待って、容易やすやす討つに越したことはない」こ

れがホーキン氏の意見である。

「なるほど、それがよろしかろう。逸いつをもつて労を討つ、これ日本の兵法の極意じゃ」

「我が英国の兵法にもそういうことは記されてある。兵の極意は科学的であるとな」

「科学的とは面白い言葉だ。つまり理詰めと云うのであろう」

「さようさよう、理詰めと云うことじゃ。敢て兵法ばかりでなく、万事万端浮世の事は、すべすべからく総すべて科学的でなければならぬ」

「科学もいい、理詰めもいい、しかしその外にも大事なものがあ  
る」紋太夫は昂こうぜん然と云う。「他でもない大和魂やまとだましよ」

「大和魂？ 珍らしい言葉だな。俺にとっては初耳だ。ひとつ説明を願おうかな」ホーキン氏は不思議そうに訊く。

「いと易いこと、説明してやろう。君には忠、親には孝、この二道を根本とし、義のためには身を忘れ情のためには犠牲となる。科学や理詰めを超越し、その上に存在する大感情！ これすなわち大和魂じゃ！」

「ははあ、なるほど、よく解った。英国流に解釈すると、つまり騎士道という奴だな」

「騎士道？ 騎士道？ いい言葉だな。しかし、俺には初耳だ。」

「騎士道の説明願おうかな」

「何んでもないこと、説明しよう。我が国中古は封建時代と称し、

各地に大名が割<sup>かつきよ</sup>拠<sup>よ</sup>していた。その大名には騎士<sup>ナイト</sup>と称する仁義兼備の若武者が、武芸を誇つて仕えていた。その騎士は原則として、魍魅<sup>ちみもうりよう</sup>魍魎<sup>りやう</sup>盗賊毒蛇、これらのものの横行する道路險難の諸国へ出て行き、良民のために粉骨碎身、その害物を除かねばならぬ。多くの悪魔を討ち取つた者、これが最も勝れた騎士で、その勝れた騎士になろうと無数の騎士達は努力する。これがすなわち騎士道じゃ！」

「なるほど、説明でよく解つた。いやどうも立派なものだ。いかさまそれこそ大和魂だ」

「それではそなたは大和魂で、そうしてこちらは騎士道で、土人どもに当たるとしようぞ」

「向かうところ敵はあるまい」

「そろそろ土人も来ればよいに」

「や、にわかにも明るくなつたぞ」

危難を眼前に控えながら、小豆島紋太夫とホーキン氏とはお国自慢兵法話に、夢中になつていた折りも折り、薄暗かつた地下道の中がカツと明るく輝いたので、驚いてそつちを眺めると、石畳が落ちて出来た穴から、松たいまつ火が幾本か差し出されている。土人どもが覗いているのだ。

「さてはいよいよ下りて来るな」 「少し奥へ引つ込んでいようぞ」

地下道の二人は囁ささやき合いながら、そつと奥へ身を引いたが、ちようど幸い左右の岩壁から、体を隠かくすに足りるような二つの岩が

突き出ていたので紋太夫は左手の岩の蔭へ、ホーキン氏は右手の岩の蔭へ、素早く姿を隠したが、困ったことにはホーキン氏は手に武器を持っていない。酋長オンコツコに捕らえられた時、悉しつつか皆い掠奪されてしまった。

「小豆島氏、紋太夫殿」ホーキン氏は呼びかけた。

「何んでござるな？ 何かご用かな？」

「拙者、武器を持っていませぬ」

「武器がないとな。いやいや大丈夫。武器を持っている土人めを拙者真つ先に叩き斬るゆえ、そいつの武器をお使いなされ」

「これは妙案。お願い申す」

で、二人は沈黙した。じつと向こうの様子を窺うかがう。

と、五、六人ヒラヒラと穴から地下道へ飛んだ者がある。とまた五、六人ヒラヒラと蝙蝠こうもりのように飛び下りて来た。武器を持った土人どもである。すぐに彼らは一団となり、何か大声で喚きながら、地上を熱心に探し廻る。紋太夫の死骸を探すのもある。死骸のないのを確かめたからか、彼らはいかにも不思議そうに顔を集めて話し合つたがややあつて颯さつと別れると、一列縦隊に組を組み、ここへ足早に走つて来た。

「ホーキン氏うじ、来ましたぞ」「さようかな、それは面白い」

こちらの二人は囁き合いながら、土人の近寄るのを待っている。土人が手に持った松たいまつ火の光で、地下道の中は昼のように明るく、そのため土人の行動は手に取るように解つたが、二人は岩に



隠れているので、土人の眼には映らない。今や土人は二人の前を足早に奥へ走り抜けようとした。

日本人同士の戦いではない。相手は無作法の土人のことだ。紋太夫はあえて掛け声もかけず、振り冠っていた白刃を、ピューツと一つ振り下ろした。ドンという鈍い音！土人の首が地へ落ちたのだ。松火の光を貫いて一筋の太い血のほとばしりしが、四尺余り吹き出したのは、物凄くも壯観である。土人はあたかも枯れ木のようたおにドンと斃れて動かなくなった。

## 十九

斬ると同時に紋太夫は岩の蔭へ身を引いたが、真に素早い行動である。しかしそれにも劣らなかつたのは、斃れた土人が手に持つていた人骨製の短槍を、岩の蔭から手を伸ばし、素早く攫つたホーキン氏の動作で、槍を握るとその槍で二番手の土人の胸を突いた。「ワーツ」と云つてぶつ<sup>たお</sup>仆れる土人。胸から滾々<sup>こんこん</sup>と流れ出る血で、土がぬかるむほどである。とまたパツと岩の蔭から躍り出たのは紋太夫で、構えも付けず横なぐりに三番目の土人の肩を斬つた。すなわち袈裟<sup>けさが</sup>掛けにぶつ<sup>ばな</sup>放したのである。「キヤツ」といふとその土人は酒樽のようにぶつ<sup>たお</sup>仆れたが、切り口からドクドク血を零す<sup>こぼ</sup>。とたんに飛び出たのはホーキン氏で四番目の土人の腹を突いた。

「えい、ついでにもう一匹！」

叫ぶと一緒に五番目の土人を、紋太夫は腰車に匆はね上げた。

「もうよかろう」

「では一休み」

二人は声を掛け合ったが颯さつと隠かくれ家がへ飛び込んだ。汗も出なければ呼い吸きもはずまない。

それこそ文字通り一瞬のうちに、五人殺された土人どもは、味方の死骸を捨てたまま、悲鳴を上げて逃げ出した。元来た方へ逃げ帰ったのである。土人の姿が消えてしまうと同時に松火も消えたので地下道の中は暗くなった。

「アツハハハハハ、弱い奴らだ」紋太夫は大声で笑い出した。

「ホーキン氏、幾人斬つたな？」

「さようさ、二人は殺した筈だ」

「俺の方が一人多いな。俺は三人ぶツ放した」

「土人ども、どうするであろう？」

「このままでは済むまいな。いずれ大勢で盛り返して来よう」

「ちとそいつはうるさいな」ホーキン氏は考え込む。

「来る端から叩つ斬るまでよ」紋太夫は平気である。

「しかしきやつらは無尽蔵だからな」

「百人も殺したら形が付こう。茄子なすや大根を切るようなものだ」

紋太夫は豪語する。

「しかしそれまでにはこつちも疲労つかれよう」

「ナニ、疲労<sup>つか</sup>れたら休むまでよ」

「俺の考えは少し違う」考え考えホーキン氏は云う。「俺は後へ引っ返そうと思う」

「引っ返すとはどこへ行くのだ？」

「俺の通つて来たこの地下道は、幸いのことには迷宮ではない。枝道のない一本道だ。そうして社殿へ通じている。……だからこの道を二人で辿つてひとまず社殿へ出ようと思う」

「なるほど」と云つたが紋太夫は賛成の様子を見せなかつた。

「なるほどそれもよいかも知れない。しかし俺は不賛成だ」

「ふうむ、不賛成？ それは何故かな？」

「俺はオンコツコと約束した。剣<sup>つるぎ</sup>を取つて来ると約束した。是非

とも剣は取らなければならぬ」

「剣は大いに取るがいいさ。しかし今は機会おりが悪い」ホーキン氏は熱心に、「そうだ今は機会おりが悪い。とにかく一旦地下を出て、日の光の射す地の上へ出て、そうして部下を呼び集め、さらに再びこの地下道から地下の国へ侵入し、その剣を取るもよく、神秘の国の秘密を探り故郷への土産みやげにするもいい。しかしどうしても一旦は地の上へ出る必要がある」

さすがホーキン氏は英国人だけに、その云う事が合理的である。「これはお説ごもつともじゃ」紋太夫は頷いた。「よろしい、お言葉に従おう。すぐに地下を出ることにしよう」

「おおそれでは賛成か。案内役はこの俺だ」

云うより早く、ホーキン氏は地下道の奥の方へ走り出した。

おおよそ十丁も来た頃であつた。その時忽ち前方から——すなわち二人の行く手から、松たいまつ火の火を先頭に立て、その勢百人にも余るであろうか、真つ黒に固まつた一団の人数が、こなたを指して寄せて来た。

二人は驚いて立ち止まり、その一団の人数を見ると、意外も意外土人酋長オンコツコの率いる軍勢であつた。

その時、ワーツときと鬨の聲が、今来た方角から聞こえて来た。振り返つて見ればさつきときの土人が新たに人数を駆り集め後を追つかけて来たのであつた。

二人はここに計らずも腹背に敵を受けたのである。

「紋太夫殿、もういけない」ホーキン氏は嘆息した。

「いやいや、まだまだ、落胆するには及ばぬ。最後の場合には劍がござる。切れ味のよい日本刀！ たかが南米の蛮人ども、切つて捨てるに訳はござらぬ」

日本武士の真骨頂、大敵前後に現われたと見るや、紋太夫は勇気いよいよ加わり、大刀の束つかに手を掛けながら前後を屹きつと見廻したものである。

二十

ここで物語は一変する。



ここは地上の森である。

日光がキラキラと射し込んでゐる。小鳥の啼き声、蜜蜂の唸り、小枝に当たたる微風の囁きささや、何んとも云えず快い。地上には草が青々と生え紅紫繚乱こうしりょうらんたる草花が虹のように咲いてゐる。ジョージ・ホーキン氏と紋太夫とが、敵に襲われ敵を襲い、苦心してゐる地下国と比べて、何んと気持ちよく美しいことぞ。

と、森の一所から、嗶かれて神々こうこうしい老人の声と、楽し気な無邪気な少年の声とで、神を讚美する土人歌を、さも熱心に合唱している清らかな歌声が聞こえて来た。

歌声はだんだん近寄つて来る。と、一人の少年が、活潑に木の間から現われたが、他ならぬジョージ・ホーキン氏の子、美少年

のジョンであつた。

「小父さんおいでよ！ 小父さんおいでよ」

りゆうちよう

流暢な土人語でこう呼ぶと、

「ジョンよジョンよ、足が速いのう、二歳ふたつになつた牝鹿のようだ」

こう云い云い出て来たのは、酋長オンコツコを裏切つてまでジョンの危難を救つたところの、土人祭司バタチカンであつた。

「あんまりピヨンピヨンは匆ね廻つて、森の外へ出たが最後恐ろしい奴らに眼付めつかるぞよ。さあさあここへ来るがいい。青草の上へ坐るがいい。面白い話を話してやろう」

ジョン少年は穩おとなしく、祭司バタチカンの側へ行き、坐つて話を聞こうとした。

バタチカンとジョンとは親友なかよしである。ことに祭司バタチカンにとつては敵とも云うべきジョン少年が妙に可愛くてならないのであつた。

で、バタチカンはジョン少年を、最初の危難から救つて以来、一心不乱に土人の言葉をジョン少年に教えたものである。土人の言葉は簡単であり、ことにジョンは怜悯であつたので、わずかの間に覚えてしまつて、二人はかなり困難むずかしいことまで土人の言葉で話すことが出来た。

「ジョンよ、ジョンよ、さあお聞きよ。これは大事な話だからね。そうしてこれは私達のうちでも、代々祭司を務める者だけが、わずかに知っている話だからね。……昔々遠い昔に、一羽の鳥からすがあ

ったとき。その鳥は一本足でね、形は変に醜みにくかったけれど、大變利口な鳥だったそうだよ。その鳥がある日のこと土人に向かつてこう云ったそうだよ——

『チブロン島には宝はない。実は宝は海の上にある。船に乗って従ついておいで！ 私がそこまで案内しよう。けれど随分危険だよ。歌を唄う人魚とか、揺れている大岩とかその他山ほど恐ろしいことがある。それを承知なら従ついて来い。宝の側まで連れて行ってやろう』

ところが土人達は臆病で、従ついて行こうとしなかったたので、鳥はとうとう愛想を尽かしてどこかへ飛んで行ってしまったとき「それで鳥はどこへ行ったの？」ジョン少年は訊くのであった。

「さあどこへ行つたものかね。それは私も知らないよ」

「二度と鳥はやって来ないの？」

「さあそれも知らないよ」

「僕、鳥に逢いたいなア」

「どうして鳥に逢いたい？」

「僕、宝島へ行つてみたいよ」

「宝島へなら私もわし行きたい」

「鳥！ 鳥！ 一本足の鳥！」

ジョン少年は歌いながら、森の奥へ駆けて行つた。

ちようど同じ日の午後であつたが、ジョン少年は森の奥で一羽の鳥を発見した。残念なことにはその鳥は一本足ではなかつたけ

れど、しかし立派な大鳥で、少年の空想を充たせるには、充分の値打ちを持っていた。

「鳥、鳥、大きな鳥！」

ジョン少年は歌いながらそつと石を拾い取り、何気ない風を装よそおつたが、忽ちビューツと投げ付けた。彼の考えでは石を投げ付け、黒い逞たくましい二本の足の一本を折ろうとしたのである。

狙った石は誤またず、一本の足へ当たつたが、これが奇蹟とも云うのであろうか、その足が折れて落ちて来た。

「あつ」

と驚いたジョン少年は思わず声を筒抜かせたが、それより一層驚いたのは足を折られた大鳥で、バタバタと枝から離れると、さ

も倦怠<sup>だる</sup>そうに羽搏<sup>はばた</sup>きながら、森を潜<sup>ひそ</sup>つて舞<sup>ま</sup>つて行く。

「鳥、鳥、一本足の鳥！ 鳥、鳥、一本足の鳥」

ジョンは夢中に叫びながら鳥の後を追っかけた。

「ジョンよ、ジョンよ！」とバタチカンの声が、背後<sup>うしろ</sup>から心配<sup>しんぱ</sup>そうに呼ばわったが、ジョン少年は返辞<sup>へんじ</sup>さえしない。

いつしか森も出外<sup>しゅつがい</sup>れた。

と、突然、海岸へ出た。潮が岸へ寄せている。一つの小さい入江<sup>いりえ</sup>があり、そこに一艘の丸木舟<sup>まるきふね</sup>が、波に揺れながら漂<sup>たふ</sup>っていた。そうして鳥は海の上をゆっくりゆっくり翔<sup>か</sup>けて行く。

ジョンは英国の少年である。そうして英国は海国である。ジョン少年は子供ながら、海の知識には富んでいた。丸木舟ぐらい漕

ぐことが出来る。

ひらりと丸木舟へ飛び込んだ。

鳥を追おうとするのである。

二十一

一本足の鳥に誘われ、ジョン少年が走り去ったとも知らず、司祭バタチカンは林の中を声を上げながら探し廻った。

「ジョンよ！ ジョンよ！ ジョンはいないかな！ 林の外には敵がいるぞよ、林の外へ行くではないぞよ。ジョンよ。ジョンよどこにいるな！」



しかしどこからも返辞がない。

バタチカンは次第に不安になった。椰子の根もとに佇みながら心配そうに考え込んだ。林の中は静かである。ここには何んの危険もない。美しい日光と涼しい風と香のよい草花と緑の木々、これらの物があるばかりだ。旨い果物や綺麗な泉、これらの物があるばかりだ。しかし一度林の外へ出ると、恐ろしい土人が群れていよう。

「ジョンよ、ジョンよ！」

とバタチカンはまた不安そうに呼んだけれど、ジョンの返辞は聞こえなかった。

「ああ心配だ心配だ。あの子はいつたどこへ行っただろう」

益 不安は加わって来る。その時にわかには大勢の人が歩いて来るような足音がした。

ハツとバタチカンは仰天した。「オンコツコの仲間には違いない。見付かったが最後裏切り者としておきて掟通り殺されるだろう。逃げなければならぬ、逃げなければならぬ」

彼は急いで藪地の方へ足音を忍んで走って行った。しかし藪地へ届かない前に彼は敵に見出みだされた。それはオンコツコの仲間ではなくて、日英同盟の軍隊であつた。すなわち来島十平太とゴルドン大佐との連合軍であつた。

忽ちバタチカンは縛いましめられ二大将の前へ引き据えられた。

「これ貴様は何者だ？」

ゴルドン大佐がまず訊いた。

「土人の神職かんぬしでございます」バタチカンは英語でこう云った。

ジョン少年からバタチカンは、速成に英語を学んだので普通の会話ぐらいは出来るのである。

「貴様の名は何んと云う？」

「はい、バタチカンと申します」

「仲間の土人はどこへ行つた？」

「私、一向存じません」

「何、知らぬ？ それは何故か？」

「仲間にとってこの私は裏切り者でございます」

「何をして裏切つた？」

「ジョンという子供を助けましたので」

これを聞くと英人達にはわかに態度を改めた。

「ジョン少年を救ったのはさてはバタチカンお前であつたか。乱軍の場合ではあつたけれど、一人の土人がジョン少年を酋長オンコツコの毒刃から救い、小脇に抱えて逃げ出したのを遠目ながら確かに見た。そう聞いては粗末に出来ぬ。バタチカンの縛いましめを解かなければならない。……さて、ところでジョン少年は今もお前の手もとにいやうな？」

「それがいないのでございます」

「ナニ、いない？ どこへやつた？」

「いえやつたのではございません。消えてなくなつたのでござい

ます」

それからバタチカンは今までの事を、貧しい会話と手真似とで出来るだけ詳しく物語った。その態度にも、言葉にも偽りらしいものは見えぬ。ゴルドン始め人達は信用せざるを得なかつた。

「探さねばならぬ。探さねばならぬ」

英人達は云うまでもなく日本方でもこう云つて、搜索の人数を出すことにした。

しかし、いくら探してもジョンの姿は見付からなかつた。で、人達は絶望してまた一所へ集まつた。

ジョン少年はどこへ行つたのであろう？

ゴルドン大佐はバタチカンを捉らえ、いろいろのことを訊いて

見た。

「実は俺達は土人軍を追って、島を縦横に駆け廻ったところ、不意に一時にその土人達が姿を隠してしまったのだ。まるで地の中へ吸い込まれたようにな。……この島には地下へ通う抜け穴のようなものがあるのでないかな？」

「はい、抜け穴がございます」

「おおあるか！ どこにあるな？」

「しかも三つございます」

「おお、そうか、教えてくれ」

「一つは社殿でございます」

「ナニ、社殿？ 社殿のどこに？」

「はい床下にございます」

「それは少しも気が附かなかつた」

「それからもう一つは林の奥の窟いわやの中にございます。しかしここからは、容易のことでは地下の世界へは行けません。迷路が作られてありますので」

「で、もう一つはどこにあるな？」

「はいこの島の裏海岸の荒野の中にございます」

「さてはそこから逃げ込んだものと見える」

「恐らくさようでございましょう」

「地下の世界とはどんな世界かな？」

「恐ろしい所でございます。神秘の世界でございます」

## 二十二

一本足の大鳥はズンズン海上を翔けて行く。

ジョン少年はかいあやつ權を操りドンドン小舟を進ませる。空は晴れ、海はな凪ぎ、大變長閑なのどかひより日和である。

舟はズンズン進んで行く。

長い間漕ぎ続けた。振り返つて見ると、チブロン島は低く海上へ浮かんでいる。海鳥が無数に飛んでいる。

鳥はどこまでもか翔けて行く。

今の時間にして一時間余りジョン少年は漕ぎに漕いだ。その時



二つの大岩が行く手の海に現われた。伝説にある浮き岩である。岩のくせに水に浮いている。そうして互いに衝突ぶつり合い、恐ろしい泡沫しづきを揚げている。その泡沫は雪のように四辺あたりの海を濛々と曇らせ、行く手をすつかり蔽い隠している。そうして互いに衝突ぶつり合う音が雷のように響き渡る。

鳥は二つの浮き岩の間を電光のように翔け過ぎた。

そうして背後うしろを振り返ったが、ジョン少年を呼ぶかのように、「コー」「コー」と啼いたものである。

ジョン少年は躊躇ちゆうちよした。岩の間を乗り切ることが困難むずかしそうに思われたからだ。で彼は乗り切るのを止めて、一つの岩の周囲まわりを廻り先へ出ようと考えた。しかしその間に鳥の行方ゆくえが見失わ

れたらどうしよう。それこそ虻蜂捕らずである。

「勇氣、勇氣、勇氣が大事だ！ 冒険、冒険！ 冒険に限る！  
構うものか乗り切つてしまえ！」

ジョン少年は決心した。で櫂かいに力をこめ、岩と岩とが衝突ぶつり合  
い、やがて離れた一髪いかりの間にスーッとばかりに突つ切つた。とた  
んに左右から二つの岩が轟然いきものと憤怒いかりの叫びを上げ、動物いきもののよう  
に衝突ぶつつて来たが、わずかに舟尾ともに触れたばかりで舟も人も無事  
であつた。

鳥はと見れば行く手の空を悠々と向こうへ翔けて行く。安心を  
したジョン少年は、さらに櫂かいに力をこめ先へ先へと漕いで行く。  
こうして半時間ばかり経つた時一つの小島が行く手に見えた。

近附くままによく見ると、子供達が沢山遊んでいる。それは非常に美しい島で、虹を空から持つて来たように種々いろいろの花が咲いている。赤、白、黄、紫、藍、黄金色！空色をした花もあれば桃色をした花もある。花間はなまでは兔が飛んでいる。可愛い緑色の小さい森！そこでは栗鼠りすが啼いている。森から流れ出るリボンのような小川！水が銀色に光っている。沢山の子供達は手を繋つなぎ合あい輪を作つて踊つている。そうして彼らは唄つている。

いらつしやい、いらつしやい、いらつしやい、

夢の島、絵の島、お伽とぎ噺の島、

いらつしやい、いらつしやい、いらつしやい、

ジョン少年はしばらくの間、漕ぐ手を止めて見惚みとれていた。

「皆な楽しそうに遊んでいるよ。僕も一緒に遊びたいな」  
また歌声が聞こえて来る。

いらっしやい、いらっしやい、いらっしやい、  
花を摘んで差し上げましょう、  
ここにはお乳が流れています、  
甘い蜜もございます。

蜂はブンブン、蝶はヒラヒラ、  
夢の島、絵の島、お伽とぎの島、  
いらっしやい、いらっしやい、いらっしやい。

唄いながら子供達が踊っている。足が揃って上へあがる。手が揃って前へ出る。輪がグルグル渦を巻く。伴奏の役目は小鳥であ

る。

「ああいいなあ」とジョン少年はその子供達うらやが羨ましくなった。

「上陸して一緒に遊ぼうかしら」

で、かい櫂へ力をこめ、小舟を島へ着けようとした。その時ハツと気が付いて行く手の空を眺めて見た。彼を導く大鳥の姿が遙か彼方こうの空の涯はてを今にも消えそうに翔けている。

「あ、しまった！ 見失ってしまおう！」

ジョン少年は吃驚びっくりしたが、急いで舟をグルリと廻すと、島を見捨てて漕ぎ出した。尚後ろからは子供達の唄う楽しそうな歌声が聞こえて来る。それは誘惑の声である。しかしもはやジョン少年は心を乱そうとはしなかった。ただ一心に漕ぎ進んだ。

随分久しく漕いだので大分腕が疲労<sup>つか</sup>れて来た。その時行く手に陸が見えた。そうして鳥はその陸を目がけ静かに静かに舞って行く。

ようやく岸へ漕ぎつけて見ると、鳥の姿がどこにも見えない。「あ、とうとう見失ってしまった」ひどく落胆したものの、またこうも思つて見た。「つまり鳥はこの陸地まで、僕を案内して来たのかもしれない。物語の中の宝物は、この陸のどこかにあるのかもしれない」

岸の木立ちへ藤蔓で舟をしつかり繋<sup>つな</sup>いでから、ジョン少年は上陸した。そうして奥の方へ歩いて行つた。

間もなく一つの河へ来た。河岸に乞食こじきが転がっている。古い衰えた土人乞食で、手足は垢黒み衣裳は破れ、悪臭がプンプン匂つて来る。とても穢きたない乞食であつたが、ジョン少年を呼び掛けた。

「小僧、小僧、ちよつと待て！」

ジョンは吃びっくり驚して立ち止まった。

「俺は病気で歩くことが出来ぬ。俺を背負つて河を越せ！」横柄な不遜な物云いである。

ジョン少年はムツとしたが、相手が年寄りの病人だと思つと、怒鳴り返すことも出来なかつた。かえつて乞食が氣の毒になつた。

「病氣なの？ 気の毒だなあ。ああいいとも背負ってあげよう」  
こう云いながら背を向けた。と、乞食は立ち上がり、痩せ涸れた  
体を凭もたせかけたが、見掛けに似合わず目方がある。

「ううん、畜生、ヤケに重いなあ」呟き呟きジョン少年は河を向  
こうへ越して行つた。

すると乞食は負われながらむやみと悪態を吐つくのであつた。

「ヤイ薄うす野呂！ 間抜け野郎！ そんな方へ行くと溺れるぞ！

そつちは淵だ！ 深い淵だ！ ヤイヤイ小僧どこへ行くんだ！

そんな方へ行くと躓つまずくぞ！ そこには大きな岩があるんだ！ 何

んというこいつは馬鹿なんだろう！ 真つ直ぐに行きな真つ直ぐ  
に。そうだそうだ真つ直ぐにな。おやこの餓鬼は横へ曲がつたな。



餓鬼のくせに云う事を聞かぬ。根性曲がりの悪垂れ小僧め、ほんとに小憎らしい小僧じゃアねえか！」などと憎々しく怒鳴るのであつた。

ジョン少年は何んと云われても、相手になろうとはしなかつた。「可哀そうな乞食だよ。あんまりこれまで苦労したので気が狂つたに違いない」——こう思えば腹も立たない。で黙つて進んで行く。

やがて河を渡り切るとジョン少年はほつとした。そこで乞食こじきを背中から下ろし帽子を取ると挨拶した。

「お爺さんさようなら。僕はこれで失敬するよ」

「まあお待ち」と乞食は云つた。「お前はほんとに感心な子だね。

よくお前は忍耐したね。俺はほんとに感心したよ。お前はきつと成功するよ。それは俺が保証してもいい。……さあ、ご褒美にいい物を上げよう」

こう云いながら左右の手を、ジョンの眼の前でパツと開いた。黒い色をした石の玉が二つ掌てのひらに載つかっている。

「これはな」と老人は説明した。「世に珍らしい武器なのだよ。

だからこれさえ持つていれば、大概の危難は遁のがれることが出来る。恐ろしい敵が襲つて来ていよいよ命があぶなくなったら、こいつをその敵へ投げ付けるがいい。まず最初に一つ投げる。それからもう一つ投げ付ける。そうしたらお前は助かるだろう。ではさようなら、健康たっしやで行くがいい」

乞食はそのまま行ってしまった。

ジョン少年は乞食の後をしばらくじつと見送っていたが、奇妙な黒い二つの玉を上衣のポケットへ蔵い込めど、足に任せて歩き出した。すると遙かの行く手に当たって一軒の家が現われた。もうこの時は夕暮れでジョン少年は疲労れてもいたし酷く腹も空いていたので、その家へ行って、宿も乞い食物も貰おうと決心した。邸の造作も異様であったが、永く手入れをしないと見えて、門は傾むき屋根は崩れ凄まじいまでに荒れていた。——見たこともない家造りである。

「ご免！ ご免！」

と案内を乞うた。誰も答える者が無い。ジョン少年は途方に暮

れてぼんやり門口に佇たたずんだが、

「もし叱られたら謝まるばかりだ。構うものかはいってやれ」

——そこは英国の冒険少年、大胆に家の中へ入って行った。すると大きな部屋があり、一人の男が寝ていたが、ジョン少年の姿を見るとムクムクと体を起き上がらせた。そうしてジョンを睨み付けた。

「貴様は誰だ！」と大きな声で、突然その人は怒鳴ったものである。不思議なことにはその人は、土人の言葉は使うけれど、人種は土人ではなさそうである。

「怪しい者ではありません」ジョン少年は急いで云った。

「道に迷った子供です」

「いやいや貴様は泥棒だろう！　また聖典を盗みに来たな！」不思議な男はまた怒鳴った。「貴様は蛇使いの一味だろう!!」

「そんな者ではありません。僕は英国の少年です。ジョン・ホーキンと云う子供です」

「嘘を云え悪者め！　が、子供などは相手にしない。サツサとここを立ち去るがいい。そうして蛇使いの婆さんに云え、早く聖典を返せとな！」

「僕、蛇使いの婆さんなどに一度も逢ったことはありません」

「ああ睡い、俺は寝る」云ったかと思うと、その男は肘を曲げてゴロリと寝た。とすぐいびき鼾が聞こえ出した。

## 二十四

ジョン少年は呆氣あつけに取られ、少しの間立って見守っていた。

その時一人の少年がツカツカと部屋の中へはいつて来た。年恰か好っこうはジョンぐらいである。やはり土人ではなさそうである。

「おや君はどなたです？」その少年は審いぶかしそうに訊いた。その言葉は土人語である。

「道に迷った子供です」

「ああそうですか、それはお気の毒……」その少年は優しく云つた。親切そうな少年である。

「君は土人ではありませんね？」ジョン少年はまず尋ねた。

「ええ僕らは日本人です。……君も土人にはありませんね？」

「そうです僕は英国人です」

「英国人？ ああそうですか。で名前は何んと云うのです？ 僕の名は大和日出夫」

「僕の名はジョン・ホーキン」

「英国というところの辺です？」

「遠くの遠くの海のアなたです」

「そこから一人で来たのですか？」

「どうして一人で来られるものですか。お父さんや仲間の者と、海を越えて来たのですよ」

「その人達はとうしました？」

「土人と戦争をしています。……とここでここはどこなのですか？大陸ですか島ですか？」

「チブロン島の裏海岸です」

「オヤやっぱりチブロン島ですか」 ジョン少年は吃驚びっくりしたが、  
「日本というのはどんな国ですか？」

「日本は東洋の君子国ですよ。そうして人間は利口しやうですよ。尚しやう武ぶの氣象に富んでいます」

「チブロン島から近いのですか？」

「いいえ非常に遠いのです」

「いつこの島へ来られたのですか？」

「ちようど、今から五年ほど以前まえに」



「何んのために来られたのです？」

「隠された宝庫を探すためにね？」

「やはり君達もそうなんですか」ジョン少年は眼を円くしたが、  
「そうして宝は見付かりましたか？」

「もう一息というところでとうとう失敗したのですよ。……つまり聖典を盗まれたのでね」

「その聖典とはどんなものですか？」

「漢文で書かれた本ですよ」

「漢文というと支那の文章ですね」

「ええそうです支那の文章です。……その聖典には、益ためになる話が数限りなく書いてあるのです。……大事な大事な本なのです」

「いったい誰が盗んだのです？」

「蛇使いの婆さんがね」

「その婆さんはどこにいます」

「地下の世界にいるのだそうです」

「そんな世界があるのですか？」

「ええあるということですよ」

「何故他人の本なんか盗んだのでしょうか？」

「宝の在所あつかが書いてあったからです」

「隠された宝と婆さんとは何か関係でもあるのですか？」

「その婆さんが守り主なのです。その隠された宝のね。で、婆さんは本さえ盗んだら宝は安全だと思ったのです」

「晩に来てこつそり盗んだのですね？」

「いいえ、そうではありません。その婆さんは毎日のようにここへ遊びに来ていたのですよ。そうしてある日大威張りで聖典を攫さらつて行つたのですよ。土人酋長オンコツコなどもよく遊びに来たものです。その婆さんとオンコツコとがチブロン島の支配者なのでね。つまりオンコツコは地上の支配者、婆さんが地下の支配者なのです。そうして二人は力を合わせて宝を守っているのですよ」

「すると君のお父様はその婆さんやオンコツコ等などと、以前まえから仲がよかつたのですね？」

「つまりお父様はその二人を利用しようとしたのですよ。そやつらの口から宝の在あり所かを確かめようとしたのですよ。……すべて野

蛮人というものは、歌を唄うことを好みますね。ことに蛇使いの婆さんは酷くひどそいつが好きだったので、万葉という日本の古歌へ今様の節をくっ付けて、そいつをお婆さんへ教えたり、日本語を教えたりしたんですね。語学にかけては野蛮人どもは本当に立派な天才ですね。すぐに覚えてしまいましたよ。それを有難いとも思わずに聖典を盗んだというものです。それからというもののお父さんはすっかり気持ちが変わって、人さえ見れば、泥棒だと思ひ悪口ばかり吐くのですよ」

二人の少年は話している間に、互いに親しみを感じて来たのだつた。と、突然ジョンが云った。

「僕、武器を持っています！ 蛇使いの婆さんを退治てやろう！

地下の世界へ行けさえしたら、きつとそいつを退治てやる！」

「地下の世界へなら行けますよ！」

大和日出夫は元気よく云った。「この附近ちかくの野の中に地下へ行く道があるのです」

## 二十五

「地下へ行く道があるんだって？ そいつを僕に教えておくれ。」

そうして二人は地下へ行こうよ」

ジョン少年はこう云った。

「ああいいとも、教えてあげよう」

大和日出夫は喜んだ。それから彼は先へ立つて、ジョン少年を案内した。

館を出ると荒野である。二人は荒野を歩いて行く。

やがて一つの空井戸へ出た。空井戸だから水がない。そうして井戸の一方の側がわに不細工に出来た階段がある。

「ね、ここにある階段ね。これが地下へ行く道なのさ」日出夫は云つて指差した。

「それじゃここから下りて行こうよ」

「では僕が先へ行こう」

で、日出夫が先に立ち、その後からジョンが続き、空井戸を下へ下りて行った。

間もなく二人は底へ着いた。細い横穴が通じている。それを二少年は辿って行く。

道は案外平坦で山もなければ坂もない。ただ暗いのが欠点である。

二人はドンドン走って行く。

二時間余りも走った頃、行く手に当たって人声がした。

「いよいよ地下の国へ着いたようだな」

「土人どもが騒いでいる」

「気を付けて行こうぜ」「そつと行こうよ」

二人は互いに戒め合い、足音を忍んで近寄って行った。

小豆島紋太夫とホーキン氏とが、前後に大敵を引き受けて進退全くきわまつたことは、既に書き記したが、さてその後どうしたかと云うに、他に手段もなかつたので小豆島紋太夫はオンコッコ軍に向かい、またホーキン氏は地下人軍に向かい、悪戦苦闘をしたものである。

ワツワツという叫び声、悲鳴、掛け声、打ち物の音、狭い地下道は一瞬にして地獄のような修羅場となつたが、その中で紋太夫は十五人、ホーキン氏は十人の敵を生死は知らず切り伏せた。

これには土人軍も辟易したが、ド、ド、ド、ドと一度に崩れを打ち、元来た方へ引き返したが、しかしすっかり逃げたのではなく、一時退却したまでである。



こなた二人はホツとしたが、さすがに体は疲労<sup>つか</sup>れていた。

「さてこれからどうしたものだ」こう云つたのはホーキン氏である。

「いずれすぐに盛り返して来よう。戦うより仕方がない」紋太夫は慥然<sup>ぶぜん</sup>として云つた。

「さよう、戦うより仕方あるまい。敵は大勢味方は二人、とてもこつちに勝ち目はないな」ホーキン氏は暗然とした。

「そうばかりも云われない」紋太夫は故意<sup>わざ</sup>と元気に、「世には天祐というものがある」

「俺はそんなものは認めない」ホーキン氏は冷ややかに、「それは憐れむべき迷信だ」

「いやいや決して迷信ではない。日本には沢山例がある」

「いや迷信だ。非科学だ。合理的とは認められぬ」

「西洋流の解釈だな」

「そうして正しい解釈だ」

「しかしそいつはまだ解らぬ。……や、来た来た盛り返して来たぞ。議論をしている暇はない」

「うん、来たな。サア戦争だ」

二人はそこで以前まえのように前後の敵に向かうことにした。

衆を頼んだオンコツコ軍はひたひたと紋太夫へ攻め寄せる。

ビクともしない紋太夫は、ピッタリ岩壁へ体をくっ付け、しばらく敵を睨んでいたが、パツと敵の中へ飛び込むと、やにわに二

人を切り伏せた。そうして次の瞬間にはピツタリ岩壁へ身を寄せた。と、またパツと飛び込むと同じく二人を切り伏し、伏した瞬間には彼の体は既に岩壁へくっ付いている。

六人、八人、十人と、見る見る土人は切り伏されたが、紋太夫も体へ一、二箇所傷を負わざるを得なかつた。

この凄まじい太刀風にまたもや土人軍は退却したが、その時忽然地下道を震わせ轟然たる大音響が鳴り渡り、それと同時にその時まで雲霞うんかのように集まっていたオンコツコ軍が数を尽くしバタバタと地上へ転がった。

濛々と立ち上る黄色い煙り、プンと鼻を刺す煙硝の匂い、誰か爆弾を投げたと見える。

あまりの意外に紋太夫は、驚きの眼を見張つたまま暫時ざんじ茫然と佇たたずんでいたが、忽ち煙硝を分け、二人の少年が現われたのを見ると、さらに驚きを二倍にした。

その少年こそ他ならぬジョン少年と日出夫である。

## 二十六

一方ジョージ・ホーキン氏は、地下人どもを相手とし、人骨製の槍をもつて、悪戦苦闘を続けていた。五人の土人を突き伏せた時、自分も数痕すうこんを蒙こうむつたが、そんな事にはビクともしない。さらに敵中へ飛び込んで行つた。その時、耳じだを貫いたのが大爆発

の音響である。

これにはホーキン氏も驚いたが、一層驚いたのは土人達で、ワツという悲鳴を上げると共に十間余りも逃げ延びた。

で、ホーキン氏は振り返って見た。濛々たる煙り、累々たる死屍、その中から走り出た二人の少年のその一人が、自分の子のジョンだと知った時、その喜びと驚きとはほとんど形容の外ほかにあつた。

「ジョンよ！ ジョンよ！ ジョンではないか！」

思わず大声で呼んだものである。

呼ばれたジョンはホーキン氏を見たが、

「あッ、お父様さんだ！ お父様さんだ！」

歡喜の声を高く上げると、鞠まりのように飛んで来た。それをホーキンは両手を拡げひしとばかりに抱き締めた。

親子久しぶりでめぐりあいの邂逅あいである。死んだと思ったのが生きていたのである。……しばらく、二人は抱き合つたまま、一言も云わずに立っていた。涙が頬をつたわっている。

と、不意にジョン少年は地下人の群れを睨んだが、

「ああ、あいつらは土人ですね。憎い僕らの敵ですね。それでは僕退治てやろう」

云うより早く、ポケットから、れいの不思議な乞食から貰った黒い玉を取り出すと、土人目がけて投げ付けた。

ふたたび轟然たる爆発の音が、坑道一杯に鳴り渡つたが、続い

て起こった大音響は全く予期しないものであった。

その辺の岩組が弱かったためか、左右の岩壁と天井とが、同時に崩れて来たのである。

地下人どもは一人残らず岩石の下へ埋められたが、今まで通じていた地下への道も同じくその地点で埋没された。

こうして腹背敵を受けたその危険からは遁がれたが、神秘を極めた地下国へは再び行くことが出来なくなった。

しかし地上へは出る事が出来る。

でホーキン氏を先頭に、ジョン少年、大和日出夫、小豆島紋太夫が殿しんがりとなり、坑道を先へ辿ることにした。

一里余りも行った時、道が二つに分れていた。左へ行けば社殿

へ出られ、右へ行けば空井戸へ出られる。

「さてどっちへ行つたものかな？」——ここで一同は躊躇した。

その時、左手の坑道から大勢の足音が聞こえて来た。そうして人声も聞こえて来た。

「また土人軍がやって来たらしい」一同は少なからず当惑した。

大勢の足音はそういう間も次第次第に近寄つて来る。はつきり人声も聞こえて来る。

「や、あれは日本の言葉だ」紋太夫は思わず云つた。

「英国の言葉も雜っている」続いてホーキン氏もこう云つた。

たいまつ松火の火を真つ先にやがて人影が現われたが、それは土人の

軍勢ではなく、土人祭司バタチカンを案内役に先に立てたすなわ



ち日英の同盟軍——来島十平太とゴールドン大佐と、彼ら二人の部下とであつた。

「これはこれは小豆島殿！」 「ああお前は十平太か！」

「これはこれはホーキン隊長！」 「おお君はゴールドン大佐か！」  
忽ち双方から歡喜に充ちたこういう会話が交わされた。

そこで一同熟議の結果、大和日出夫の父の邸へひとまず落ち着こうということになった。で、道を右に取り、元氣よく一同は先へ進んだ。

一里余りも進んだ時、狭い坑道は行き詰まつた。空井戸の底へ来たのである。そこで一同は順々に空井戸を上へ登つて行つた。それから日出夫を先に立て、荒野をズンズン歩いて行つた。

間もなく日出夫の邸へ着いた。

思わぬ大勢の来客に日出夫の父は仰天したがまた甚く喜びもした。

誰も彼も空腹であつた。日出夫の父は家内を探しあるだけの食物べものを提供した。

それから一同一室に集まり今後の方針を議することとした。

真つ先に立ち上がつて発言したのは大和日出夫の父であつた。

「拙者は日本の本草家大和節やまとせつさい齋と申す者でござる」

これを聞くと紋太夫は驚いたような顔をしたが、

「十二大和節齋殿とな？ これはこれはさやうでござつたか。和

漢洋の学に通じ、本草学の研究においては一流の学者と申すこと、

噂うけたまに承うけたまわつておりました。しかし今より十数年前、支那シヤンハイ上海ハイの方面にて行方不明になられたと、もつぱらの評判でござりました。が、意外も意外このような土地に、ご壮健にておいでとは、不思議な事でござりますな」

「いやそれには訳がござる」節齋は微妙に笑つたが、「まずともかくもお聞きください。これは不思議な話でござる。そうしてこれは皆様にとって最も有益な話でござる。実はな拙者 上シヤンハイ海ハイにおいて珍らしい書物を手に入れたのでござる」

大和節齋は演説を続けた。――

「さよう、拙者は上海シャンハイにおいて、珍らしい書物を手に入れました。孔子以後現代までの聖人賢人悪人どもの知識について書き記したもので、この本一冊持っていさえしたら、世界のあらゆる出来事はさながら掌上を指すがごとく理解出来るのでございます。で、拙者はこの書物を『聖典』と呼ぶことに致しました。さて、その聖典の暗示によつて、この島のどこかに大宝庫があり、発掘を待っているということをおぼおぼろ気ながら知ることを得たのは十数年前のことであつて、その時以来この島へ移住し、土人どもと交際をし今日まで暮らして参りました。最近聖典を失いましたため、一時研究を放擲ほうてきしましたが、大挙して諸君が参られたから

は、再び勇氣を揮<sup>ふる</sup>い起こし、所期を貫徹致すべく努力するつもりでございます」

ここで彼は一咳<sup>がい</sup>したが、

「さて、ついては今日まで、十数年間この島に関して、研究致しました成績について、あらかたお話し致しましょう。……まず第一この島には宝石の土蔵がございます」

ここでまた一咳した。

「それから第二にこの島には黄金の土蔵がございます。そうしてこの島の樹木たるやいずれも珍木でございます。要するにこの島その物が一大宝庫なのでございます。しかるにこの島の土人なる者が、昔から剽<sup>ひょうかん</sup>悍<sup>かん</sup>でございましたので、幾多著名の冒険家達

もついにこの島を窺うことが出来ず、今日まで捨てられておりました。さてところで、この島には、これら天然の財産の他に、人工的の大財宝が隠されてあるのでございます。すなわち代々の土人酋長が部下を従え海を越え、他国に向かって侵略し、奪い取ったところの貨幣珍器が、莫大もない額たかとなつて隠されてある筈でございませう。ところでそれはどこにあるかというに、今日までの研究によれば地下の世界にある筈です。そして地下のどこにあるかというに、この島の伝説として語られている活いきつるぎ劍の神殿に、隠されてある筈でございませう。拙者をして云わしむれば、活いきつるぎ劍に関する伝説などは作り話としか思われませぬ。つまり物々しい伝説を作り地下の世界を神聖の物とし、他人の侵入を防いだので

あります。秘密の通路を二つ設け、その一方を迷路としたのも侵入を防ぐ手段であります。

で、我々がその財宝を手に入れようと思うなら、是非とも地下の世界へ行き、その活き剣の神殿なるものを発あばかなければなりません。しかるにまことに残念なことには、二つの中の一つの通路は、完全に破壊されてしまいました。でこの道からは行けません。ところでもう一つの迷路からも絶対に行くことは出来ません。お聞きすれば紋太夫殿は、迷路に住んでいる巫女みこに教わり、奇数偶数、奇数偶数と、こう辿って行かれた結果、地下の世界へ参られたというが、しかし再びその巫女の所へどうして行くことが出来ましょう。なるほど、巫女の住む場所からはそういう順序でも行

けましよう。しかし入り口から巫女の部屋へはそういう順序では参れません。もしそんな順序で参れるようなら、それは迷路ではありません。仮りにも迷路とあるからは、そんな簡単な順序では到底行くことは出来ません。

で、要するに地下の世界へは、今のところ我々は、絶対に行けないのでございます。

ではどうしたらよからうか？

当分の間我々には、地下の世界の財宝を諦らめ、この天産の無限に多い島その物の開拓に従事すべきではありませんまいか。そうして緩々ゆるゆるその間に、壊れた地下道を修繕するもよし、新に開かいさ鑿くするもよし、手段はいくらもございます。その上で地下へ参



つたなら、成功することと思われます」

節齋の長い物語はようやくここで終りとなった。

他に手段がなかったので、紋太夫もホーキン氏もその説に従い、島を開拓することにした。

まず住宅が作られた。

各自愉快に生活した。

予想にも増してこの島には天産物が豊富にあつた。規則正しい労働と、この時代の文明から推してきわめて進んだ設備とで、彼らはドシドシ発掘した。

この間、島の土人達と、幾度か小競合こぜりあいが行なわれたが、とて  
も彼らに敵すべくもない。間もなく完全にチブロン島は彼らの手

中に帰することになった。

島の政体は共和であつた。第一期の大統領には紋太夫が選ばれた。選挙は毎年行なわれ、二期の大統領にはホーキン氏があつた。大和節齋は老人ではあり、且つ学者でもあつたので、最高顧問といふことになった。祭礼方面は土人司祭のバタチカンつかさどが司つた。

ジョン少年と大和日出夫とは、この共和国の寵児として仲間の人から可愛がられたが、云うまでもなくこの二人はこの上もない親友であつた。

平和の月日が過ぎて行つた。

それは蒸暑むしあつい夏の陽が、平和な島の草や木に、キラキラあたつているある日であつたが、ジョン少年と日出夫とは、海岸の岩へ腰を掛け、愉快な会話に耽けつていた。

「……で、僕には不思議なのだ」ジョン少年がこう云つた。

「ナーニ、ちつとも不思議じゃないよ」日出夫は笑つて反対した。

「要するにそれは蜃気楼しんきろうさ」

「蜃気楼だつて？ そんな筈はない。確かに僕は見たんだからね」

「でも、上陸はしなかつたんだろう」

「ああ上陸はしなかつた。少し先を急いだものだから」

「では確かに島があつたと断言することは出来ないじゃないか」

「しかし、確かに見たんだからね」

「人間の眼というものは、案外アテにならないものでね」

「それに僕は歌声を聞いたよ。沢山の子供達が輪を作つて、『いらつしやい、いらつしやい、いらつしやい、夢の島絵の島お伽ときばの島、いらつしやい、いらつしやい、いらつしやい、いらつしやい』ツてね、  
なし 声を揃えて唄っているのを、僕はハッキリ聞いたんだが、これもやはり蜃気楼しんきろうかしら？」

「いやそれは空耳だよ。でなければ聞き間違いだよ。潮の音か風の音かが、そんなように聞こえたのさ」

「でも繰り返して聞こえたがな」

「人間の耳というものは案外アテにならないものでね」日出夫は

自説を曲げなかった。

ややあつてジョンはまた云つた。「君は伝説を信じるかね？」

「それは伝説の性質によるね」

「では鳥からすの伝説は？」

「鳥の伝説？ 聞いたことがないね」

「一本足の大鳥が、隠されてある宝の島へ、案内するという伝説だがね」

「で、誰が話したね？」

「土人司祭のバタチカンがね」

「いや僕は信じないね。……だって君そうじゃないか、一本足の鳥なんてものはどこの国にだってありやしないからね」

「ところがあつたから面白いじゃないか、僕はこの眼で見たんだよ。僕はその鳥に案内されて、島の表から裏側まで、つまり君の家へまで、やつて行くことが出来たんだよ」

「なるほど」と日出夫は鹿しかつめ爪らしく、「ほんとに君が見たのなら、そうして僕が君のように、その鳥を見ることが出来たら、そうしたら、伝説を信じよう」

この言葉の終えないうちに、一羽の鳥が林の中から二人の方へ翔かけて来たが、すぐ前面まえの岩の上へ静かに止まって羽根を畳んだ。

「一本足の鳥！ 一本足の鳥！」

ジョンは飛び上がって叫び出した。見ればいかにもその鳥は、一本の足しか持っていない。

「ああ本当に一本足だ！」

日出夫も驚いて飛び上がった。

と、鳥は悠々とこの時岩から舞い上がったが、一つの大きな円を描き、それからいかにも緩やかに海の方へ翔け出した。

「ジョン君、僕は信じるよ！ 君の話した伝説をね！ さあアノ鳥を追っ駈けよう！」

そこで日出夫とジョン少年とは、纜つないであつた小舟に乗り、海上遙かに漕ぎ出した。

風もない夏の海は、蒼く平らにトロリと澄んで、魚の影さえ透いて見える。

鳥は二人を誘いざなうかのように、時々こつちを振り返って見ては悠

々翼を羽搏いた。そうして千切れるように時々啼いた。

鳥と舟とは空と海とで永い間競争した。二時間の余も競争した。その時、舟の行く手に当たって、例の浮き岩が見えて来た。

「日出夫君、日出夫君、浮き岩だよ」

ジョン少年は注意した。

「ああ本当に浮き岩だね」

日出夫は權かゝいの手を止めた。

二つの浮き岩は唸りながら、互いに相手を憎むかのように、力任せに衝突ぶつかり合っていた。飛び散る泡沫しぶきは霧を作り、その霧の面へ虹が立ち、その虹の端の一方は、陸地くちの断崖がけに懸かっていた。

その陸地はチブロン島の南の側に当たっていた。



その断崖は岩で畳まれ、諸所に鬱蒼と大木が繁り、上りも下りも出来そうもないほど、険しい様子を備えていたが、しかしどことなく人工的であつた。

この人工的の断崖の下の、深い深い海上で浮き岩が衝突<sup>ぶつ</sup>り合つているのであつた。

ここまで翔けて来た一本足の鳥は、この時にわかにか切れるように幾度も幾度も啼き声を立てたが、スーッと低く舞い下がって来た。おや！　と思う暇もなく、断崖の裾まで下り切ると、フツと姿が消えてしまった。

「やっしまった、鳥が消えた！」ジョンは驚いて叫び声を上げた。

「まあ待ちたまえ、考えがある」

日出夫少年は腕を組み何やらじつと考えこんだが、

「ねえ、ジョン君、こう思うのだよ、理由なしに鳥が消える筈がない。消えるには消えるだけの理由があろう。いや理由がなければならぬとね」

「ああ、そうとも、理由がなければならぬ」

「で、僕は思うのだがね、あの断崖の裾の辺に、何か秘密があるのだろうとね」

「ああなるほど、そうかもしれないね」

「恐らく洞窟ほらあなでもあるのだろう」

「ああなるほど、そうかもしれないね」

「しかも普通の洞窟ではない」

「そんな事までは解らないよ」

「いや僕は断言してもいい。きっと普通の洞窟ではない。非常に  
価値ねうちのある洞窟だよ」

「どうしてそんな事云えるだろう？」

「云えるだけの理由があるからさ」

「僕にはちつともわからない」

「君は浮き岩をどう思うね」日出夫少年は真面目まじめに云った。

「天工と思うかね？ 人工と思うかね？」

「それはもちろん天工だろう」

「ところが、あいつは人工なのだ」

「どういふところから発見したね？」 ジョン少年は不思議そうに訊いた。

「見たまえ、鎖くさりが見えるじゃないか」

こう云いながら日出夫少年は、二つの岩に挟まれている蒼い水を指差した。

なるほど、そう云えば鎖が見える。すっかり錆びて赤くなり、そこへ海藻がまとっているの、一見岩と見紛うけれどもまさしく太い鎖であった。

「ああなるほど、太い鎖だ！」 ジョン少年は感動した。

「鎖で繋いであるのだからこの浮き岩は人工だよ」日出夫はさらに説明した。「こんな大掛かりの浮き岩を人工で作ったというのは、決して冗談や好奇心おもいつきからではあるまい。きつと必要があったからさ」

「その解釈は胸に落ちるね」

「そこで僕はこう思うのだよ、人工の浮き岩を作ったのは、何かを防禦ぼうぎよするためだね」

「ははあなるほど、そうかもしれない」

「つまり、洞窟ほらあなが大事だからだ。洞窟に価値ねうちがあるからだ。で、その洞窟へ泥棒どもを侵入させないそのために、浮き岩なる物が作られたのさ」

「そうだそうだ、それに違いない！」ジョン少年は手を拍った。

「では早速行つて見ようや」

「よかろう」

と云うと日出夫少年は、<sup>かい</sup>櫂へグイと力をこめた。

随分危険ではあつた。けれど冒険に慣れている二少年はそれでもとうとう断崖の裾へ、自分達の小舟を寄せることが出来た。

はたして想像をした通りそこに洞窟の口があつた。

二人はすっかり元気付き、その口から舟を入れた。と二人の眼の前へ、狭い水路が現われた。水路は遠くまで続いていた。

二人はズンズン舟を進めた。舟が進むに従つて水路は次第に広くなり、やがて一つの灣へ出た。

湾の円周五丁もあろうか、その中央と思われる辺に小さな島が  
浮き出ていた。

「やあちっ小ちやい島があらあ」

「おやおや鳥があんな所にいるよ」

一本足の大鳥が、島の頂の木の枝で、羽根を畳んで休んでいた。

二少年は舟を出て、島の渚なぎさへ下り立った。

島は美しく可愛らしく周囲一町もなさそうであった。

「これが伝説の宝島だろう」

「そうだそれに違いない」

「大急ぎで宝を目付けようぜ」

「よしきた、目付けよう、競争だ！」

そこで二人は走り廻った。

日出夫少年は頂上を目がけ兎のように駈け上がった。そうしてそこで目付けたのは巨大な鉄の箱であった。腐蝕した穴から黄金の光が燦さんぜん然と彼の眼まなこを射た。

「目付けた！」

と彼は歡喜の声を灣一杯に響かせた。そうだ、彼は目付けたのであった。それこそ伝説に語られてある「チブロン島の宝庫」なのであった。

そこで二人は舟へ乗り、急いで外海へ出ようとした。

「おや、あんな所に階段があるよ！」

こう云いながらジョン少年は、灣をグルリととりま囲繞ほらしていた洞あ



窟なの内壁を指差した。

洞窟の内壁を上の方で斜めに階段が出来ていた。その上層は闇に鎖ざされほとんど見ることが出来なかつた。

好奇心の強い二少年がこれを見遁がす訳がない。二人は舟を岸へ着けると揃つて階段を上へ登つた。

三十

やがて二人は登り尽くし、不思議な神秘的な平原へ出た。蒼白い光が充ち満ちていた。丘もあれば林もあり、人家もあれば人声もした。

これぞ地下の世界であつた。

眼の前にこんもりとした森があり、一字の神社が建っていた。

活いきつるぎ剣を祀やしろつた社であつた。

と、忽ち松たいまつ火の火がこつちを目がけて走つて来た。土人が二人を目付けたのであつた。

「それ大変だ、逃げる逃げる！」

二人は急いで引き返した。階段を下り湾岸へ出、小舟の中へ逃げ込んだ。

「ヨイシヨイシヨ、ヨイシヨヨイシヨ」

二人は夢中で櫂を使った。

二人の少年の報告を聞くと、一同は驚喜して躍り上がった。にわかには海軍が編成され、宝島征伐が行なわれた。

地下人どもを平らげて、完全に宝島を占領するには、それでも二十日の日数がかかった。ようやく手に入れた宝庫の中には、大和節齋が洞察した通り、黄金の貨幣や高価な器具が今の金にして五億円余あった。

日英合同の植民地は、こうして益 繁昌した。種々の設備が行なわれ、まことに暮らしよい土地となった。政治も円満に行なわれた。

しかるにある日紋太夫は、こんな変なことを云い出した。

「俺は最近にお暇いとまするぜ」

「お暇ですって？ 何のことですか？」

来島十平太が不思議そうに訊いた。

しかし紋太夫はそれには答えず、

「首にさわつちやいけないよ、首にさわつちやいけないよ」

「ええええ、首になんかさわるものですか」

「ところで」紋太夫はまた云った。「人間の意志っていう奴は、

実に生命いのちより強いものだね」

「ははあ、さようでございますかな」十平太は怪訝けげんそうに答えた。

「どうも近来首が痛い」

「それはどうも困りましたな」

「ナ―ニ、ちつとも困りやしないよ。所期の目的はとげたんだからな」

「所期の目的とおっしゃると？」

「チブロン島の宝庫発見よ」

「それなら充分にとげられましたとも」

「で、首が痛くなったのさ」

「あなたの云うことは解らない」

「本来俺は住吉の浜で首を切られた人間だよ」

「……………」

「意志は強し！ 生命いのちより強し！」

彼は愉快そうに哄笑した。

それから間もなくのことであつたが、彼の首がポツカリ外れた。しかし一滴の血も出なかつた。その切り口もスベスベしていた。

その顔もひどく愉快そうであつた。島中の同志達もついに悲しむのを忘れてしまった。こうして紋太夫は死んだけれど、彼の精神は残っていた。

「意志は強し、生命より強し」こういう言葉によつて残っていた。

## 青空文庫情報

底本：「十二神貝十郎手柄話」国枝史郎伝奇文庫Ⅰ、講談社

1976（昭和51）年9月12日第1刷発行

初出：「中学世界」博文館

1925（大正14）年1月～8月

入力：阿和泉拓

校正：湯地光弘

2005年3月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。



# 加利福尼亚の宝島

(お伽冒険談)

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫  
著者 国枝史郎  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>